

翻刻 和漢奇事変生男子之説——日本初の「両性具有文献集」——

久米 晶文

解題

ここに翻刻した資料は、畑銀鷄はたぎんけい著『和漢奇事変生男子之説』わかんきじへんじょうなんしのせつ（安政二（一八五五）自序）である。著者である畑銀鷄、また翻刻紹介した『和漢奇事変生男子之説』自体そう人口に膾炙しているというわけではない。畑銀鷄にしても、『和漢奇事変生男子之説』にしても、これまでどちらかといえば積極的に研究対象とはされてこなかった人物であり、資料であるといわねばなるまい。薄い研究史は、たとえば『国書総目録』（岩波書店）にも反映されている。『国書総目録』は『和漢奇事変生男子之説』を、「仏」のジャンル、すなわち仏教書として分類しているのだが、これは大きな誤りである。表題の「変生男子」という仏教用語にひかれたがゆえの判断であろうと推測されるが、『和漢奇事変生男子之説』本文では、仏教のあるいは仏教者の立場にたった言説は展開されていない。『和漢奇事変生男子之説』は、広義の意味でいえば「性的奇談集」であり、もっと限定しているならば、日本初の、意識的にまとめられた「両性具有文献集」と定義されねばならない内容を含みもっているのである。

著者である畑銀鷄は、『近世人名辞典1』（青裳堂書店）、『明治維新人名辞典』（吉川弘文館）、『幕末維新人名事典』（新人物往来社）などにその名がみえている。父は畑金鷄きんけい、息子は畑鉄鷄てつけい（『和漢奇事変生男子之説』上巻・中巻に

翻刻 和漢奇事変生男子之説

「時習」の名で登場）。この金鶏―銀鶏―鉄鶏という、洒落のめしたような雅号を連ねた一族がもっていた文化的センスのなかから、『和漢奇事変生男子之説』という「性的奇談集」「両性具有文献集」は生まれた。「幕末維新」という文脈では、息子の鉄鶏が天保年間（一八三〇―四三）上野国七日市藩の藩医となり、シーボルト事件に連座して同藩お預け・永牢処分となった稲部市五郎の主治医をつとめたということが、畑一族の名を高からしめたことは否定できないものの、彼らはともに代々医家（『和漢奇事変生男子之説』中巻では「医を業とすること九代」と記す）であると同時に、三代にわたる優れた文人でもあったことを忘れてはなるまい。

父金鶏（明和四（一七六七）―文化六（一八〇九）、本名畑秀竜、字道雲）は、医師として七日市藩に仕えるかたわら、奇々羅金鶏・燕石楼・東天紅盧・観奕道人などの別号をもち、狂歌師・戯作者として活躍した。『網雑魚』『絵本百轉』『狂歌五百題』『月之奈賀免』『百千鳥』『闇雲愚抄』（以上狂歌集）、『燭夜文庫』（狂文集）、『狂歌来由』（狂歌作法）、『絵本吾妻遊』（地誌紀行）、『金鶏医談』『金鶏医談略抄』（以上医学書）などの編著書がある。息子の鉄鶏（文化二（一八一四）―文久二（一八六二）、本名畑時習、通称道意）も七日市藩藩医。画家・狂歌師としても名を知られ、著書に『款識百例』（書画）がある。

銀鶏（寛政二（一七九〇）―明治三（一八七〇））は、名を時倚、字は節昂もしくは毛義という。通称は数馬。燕石楼・平亭銀鶏・文盲散人（平亭銀鶏と文盲散人は『和漢奇事変生男子之説』の二つの自序にも署名がある。なお、「文盲」を「亡盲」とする人名辞典もある）などと号した。金―銀―鉄の三代をならべた場合、銀鶏の業績は父・息子を質量ともに凌駕している。やはり医師として七日市藩に仕えながら、狂歌・狂文・戯作など文芸百般こなさぬものはなく、少なからぬ編著書を残した。『国書総目録』によりつつ、銀鶏の仕事の一端をかいまみてみよう。

人情本『天之浮橋』『鳶恋之花菱』『浪花夢』／滑稽本『街能噂』『酒取物語』／書画関係『書画選競』『書画談叢之図』『書画名家誌』『書画薈萃』『須礼数例草』『名家書画集』／災異誌『時雨晒袖』『地震類焼場所明細書』『街廛夢』／地誌紀行『江の島まうで浜のさゝ波』／狂文集『狂文旅は道つれ』／戯文『文人穴さがし』／見聞記

『安政見聞別巻』／教訓書『家内の花』『儉約重宝記』『日ごとの心得』『御代乃宝』／名鑑・伝記『芸園一覽』『江戸文人寿命附』『近世書画人名譜』／寺社誌『金竜山観世音靈驗図絵』／動物誌『奇獣カマイタチ』／醸造書『豊年酒教草』／養蚕書『養蚕図解』／医学啓蒙書『養生教草』／隨筆『銀鷄雜記』『銀鷄三余雜記』『南柯廼夢』

分類列記してみると、銀鷄の百科全書のごとき教養と関心の広さ、さらには旺盛な執筆意欲がうかがえるだろう。むろんこれは、裏返していうと、文人にありがちな無目的な興味本位の知の集積——ディレッタンティズムといってもいい——という批判にもつながる。しかし、それこそが、学問をこととする者ではなかった銀鷄という文人の特徴を如実に示しているのではないか。確かに銀鷄の業績には方向性がない。自由に、気ままに、関心のおもむくままに、あらゆることに手をそめているのだが、それを知的ありようのひとつとして捉えることは許されないのだろうか。一切の拘束から無縁の知、どこへ流れゆくやもしれぬ知——『和漢奇事変生男子之説』は、銀鷄のそのような知性のありようのなかで位置づけられねばなるまい。銀鷄は、なにものにもとらわれぬ自由な精神で世界をみつめていた。むろん、性についても例外ではない。『和漢奇事変生男子之説』は、無方向無目的ゆえに、自由な精神を保持しつづけることができた文人の残した、日本人の性のドキュメントといっておくべきであろう。

幕末に成立した『和漢奇事変生男子之説』が、近代以降あまり多くの人の目にさらされることのないまま今日にいたった理由は、ひとえにその稀覯性にある。『国書総目録』を信賴する限り、現在確認できる写本は無窮会専門図書館と静嘉堂文庫に各一本収蔵されているのみである（後述書誌参照）。しかし、それでも夙にこの稀覯書を読んだ者は存在した。昭和二年五月、今村螺^{らえん}炎は『変態資料』二巻四号（文芸資料編輯部）に「朝鮮の半陰陽文献」を発表し、附載した「各国半陰陽文献」のなかで『和漢奇事変生男子之説』を紹介、上巻巻頭所収の「さと」の事例を引用している。今村が依拠した写本はつまびらかではないが、「さと」の事例に下巻の「やな」の記事にかかわる「富岡（御）役所」の名が混入しているところからみると、あまり良質の伝本とはいえなかったのかもしれない。また、昭和九年には、坂ノ上言夫^{のぶお}が『性器不具について』（古典科学会医書出版部）を刊行し、『和漢奇事変生男子之説』の書名をあげ



ながら、やはり「さと」の事例を引用している。坂ノ上が拠った写本も今のところ不明である。「さと」の事例は、『和漢奇事変生男子之説』にも記されているとおり、当時「一枚摺の錦絵」や「瓦版」として流布し、江戸っ子のお話をさらったようだ。参考として、銀鷄が実見したものと同一の「錦絵」を掲げておく(五一ページ参照)。『和漢奇事変生男子之説』では、この「錦絵」の文章のみが引かれている。

ところで、今村や坂ノ上が『和漢奇事変生男子之説』上巻巻頭に収められている「さと」に関する記事だけを引いているのは、どうしてもうなずけない話なのである。というのも、今村と坂ノ上は、「両性具有」という視点から前記論文や著作をものしているからである。『和漢奇事変生男子之説』には、「さと」のような「両性具有」の辺縁事例だけではなく、まさに「両性具有」そのものの記録も含まれている。下巻の「文字久米」と浮世絵師の女弟子がそれにあたる。彼女たち(彼ら)は、半月ごとに性を転換していく、女でもあり男でもある、「ふたなり(半陰陽・半男女・二形・二成・婦男・婦男生などと表記)」もしくは「はにわり(多くは半月と表記)」なのである。今村や坂ノ上が『和漢奇事変生男子之説』を全巻通読し、「文字久米」と浮世絵師の女弟子の記録を目にしていたならば、引用紹介を躊躇する理由などどこにもなかったはずである。二人は『和漢奇事変生男子之説』の巻頭部分しか読まなかったのかもしれず、あるいはなにかからの孫引きであった可能性も残されているよう。ちなみに、日本の「両性具有」研究の魁ともいえる宮武外骨の『半男女考』(半狂堂)は大正十一年の刊行であるが、『和漢奇事変生男子之説』についての言及はない。

表題の「変生男子」が仏教用語であることについてはすでに述べた。仏教用語としては、「変生」は「変成」と表記されるのが正しい。無窮会本は三巻合冊の一冊本で、表紙・各巻ともに表題を有し、すべて「変生」の表記を用いている(「無物老人」の序のみ「変成」と表記)。静嘉堂文庫本は一冊本としてまとめられたもので、表紙の表記は「変成」。巻別編成はくずれかけており、中巻に相当する箇所「変生」を用いた扉が挿入されているのみである(後述書誌参照)。「変成男子」は、第一義的には女から変じて男に成ることを意味している。女には五障があつて成仏が困難であるため、仏の慈悲の力により、身を男に変じさせて成仏させるという思想である。日本でも仏教の受容とともに

翻刻 和漢奇事変生男子之説

「変成男子」の思想は浸透し、密教の加持祈祷僧や修験者によって「変成生男子の法」が行われた。これは諸書に記録が残されているとおりであるし、『和漢奇事変生男子之説』下巻末の「変生男子の説」もそのことにふれている。

本来、厳密な仏教用語としてその意味が限定されて用いられていた「変成男子」「変生男子」は、次第に言葉としての外延を拡大し、女から男に性を転換した者、あるいは男装した女、という概念をも含みもつようになっていった（この歴史的経緯については詳細な検討が必要となるため別稿に譲る）。つまり、「変成男子」「変生男子」という言葉が、多様な性のありようを捉えるために、意味を肥大化させられた上で、用いられるようになったのである。私たちは、男と女という性のありようを自明のこととして生きている。しかし、現実の世界ではこの自明性は無根拠無力である。性は、男と女という二元論的な捉えかたから常に逸脱しようともくろんでいる。性の狡知である。自明性に依拠しては、もしくは自明性にとらわれては、この性の狡知、性の多様性を捉えることは不可能であろう。なものにも依拠せぬ自由な精神を保持する者だけが、逸脱しつづける性を逸脱のままに捉えうるのである。銀鶏が『和漢奇事変生男子之説』でみつめようとしたのは、そのような性の状態であった。

「変成男子」「変生男子」から派生した、「変成女子」「変生女子」という言葉がある。これは、男から女に性を転換した者、あるいは女装した男を意味している。もとより、「変成女子」「変生女子」という言葉は仏教とは無縁である。しかし、日本では「変成女子」「変生女子」は、「変成男子」「変生男子」と対をなす概念として用いられてきた。多様な性のありようからいえば、女から男に性を転換する者がいれば、男から女に性を転ずる者もいよう。それを捉えるために、「変成女子」「変生女子」という言葉は造語され、用いられたのであろう。銀鶏は『和漢奇事変生男子之説』に、女から男に性を転換した説話、男から女に性を転換した説話、「両性具有」の説話を収録している。その上で、表題に「変生男子」という言葉を付したのである。銀鶏は「変生男子」という言葉に、女↓男という性の転換者のみならず、男↓女という性の転換者と、男↑女という「両性具有」者の概念をも含みもたせようともくろんだことになる。

銀鶏のそのような意図を前提として、本解題では副題を「両性具有文献集」とした。このことに疑義をはさまれるむきもあるかもしれないので、蛇足ではあるがR・M・ゴールデンソン、K・N・アンダーソン著の『現代セクソロ

ジー辞典』(早田輝洋訳、大修館書店)から、「両性具有」と「半陰陽」に関連する項を引用しておきたい。

【androgyny】 「両性具有、おとこおんな、アンドロジニー、女性偽性半陰陽」

もともとは、はっきり男性でもなければ、はっきり女性でもない性的に曖昧な体格をいった。現在の使用では、アンドロジニーは、肉体、行動、衣装、人格上の男女両性の特徴の顕示を意味することがある。これは、両性愛(男性にも女性にも性的に引き付けられ、しばしば両者の間を行ったり来たりする)を指すこともある。

【intersex】 「間性、間性体質者、半陰陽」

完全な男と完全な女の間にある肉体的心理的セックス形態をいう総称名。その中には、両性愛の男と女(性的に両方の性に惹かれる)、半陰陽の男(男性器を持つが男性ホルモンに欠けるので、髭が生えないような女の特徴を示す)、半陰陽の女(女性器を持つが筋肉質の外観を呈する)、性転換症の男女(肉体的には男または女であるが、心理的には他の性に帰属する)、同性愛の男または女(しかるべき肉体的性別を有するが、自分と同じ性のものに惹かれる)、服装倒錯者(異性の衣服を着る男または女)がある。

辞書的な定義の堂々巡りはさけないのでこれ以外の項目は引かないが、「両性具有」「半陰陽」の概念が真性の半陰陽者(hermaphrodite)のみならず、きわめて広い性的ありようを包含していることを確認しておきたい。銀鷄に即しているならば、「ふたなり」「はにわり」も、女から男に性を転換する者も、男から女に性を転換する者も、すべてが「両性具有」「半陰陽」ということになる(「性転換症の男女」の行き着く先は、性の転換なのだから)。銀鷄は、それらを全体として捉え、「変生男子」と総称し、表題に用いたといえよう。注意しておかねばならないのは、銀鷄がたりついたこの「両性具有」「半陰陽」≡「変生男子」という概念が、あくまでも身体性に即したものであるという点であろう。権力による性の抑圧とそこからの逸脱、そしてその成果としての「ゆらぎの性」「両性具有」^{ポリセクシャル}「多性」の発見については、「物語」論の立場からの先行研究がある。しかし、そこで問われているのは「文学的想像力」の問題で

あつて、身体性の視点は欠落しているといつていい。

銀鷄の『和漢奇事変生男子之説』を、近世末期に成立した「説話集」とおさえてみよう。そこには、王朝物語にみられるような「典雅」さはない。身体性に即したかたちで、いいかえれば「露骨」なかたちで、多様な性のありようが語られているのみである。だがこれも、「文学的想像力」と無縁とはいえない。そもそも、性が権力によって抑圧されてきたという前提、あるいはそこからの逸脱が「文学的想像力」によって「物語」のなかで果たされるという捉え方自体、本当に正しいのだろうか。権力とは無関係に、性は常に逸脱しつづけていたのではないのか。都市という中心においても、また辺陲の地においても。それを、あるがままに読みとることをさまたげていたのは、ほかならぬ「文学的想像力」から生み出された「物語」ではなかったのか。

銀鷄について、一切の拘束から無縁の知、どこへ流れゆくやもしれぬ知をもった文人と記しておいた。その知は、無方向無目的でまとまりをもっていないともいった。それは、常に逸脱し、反乱し、自在に流れつづける私たちの性のありようとどこかで通底しているのであろう。銀鷄のこの自由な精神こそが、あるがままの多様な性について記した「説話」を、身体性をそこなくそのまますくい上げ、「説話集」のかたちにまとめあげることが可能にしたのである。このような「文学的想像力」があつてもいいはずである。銀鷄の「文学的想像力」は、先行する「ふたなり」「変生男子」「変生女子」説話群のなかにおいてみると、よりいっそう輪郭を明瞭にする。管見に入った限りでの、身体性に即した「ふたなり」「変生男子」「変生女子」説話群をほぼ年代順に並べてみた。年代は十二世紀末から、『和漢奇事変生男子之説』成立直前の一八四八年にまでおよぶ。(一)内には説話の分類を注記しておいた。なお、『古事記』『源氏物語』『とりかへばや物語』『有明の別れ』については、とりあえず除外してある。

絵巻物『病草子』(ふたなり)／奇談集『奇異雑談集』(変生女子、『和漢奇事変生男子之説』にも採録)／随筆集『朝野雑載』(変生女子二例、一例は『奇異雑談集』と同話)／神道書『古今神学類編』(変生男子)／事典『和漢三才図会』(変生女子、『奇異雑談集』と同話)／浮世草子『本朝浜千鳥』(ふたなり)／随筆集『窓のすさみ追加』

(変生男子) / 随筆集『元文世説雜録』(ふたなり) / 随筆集『半日閑話』(ふたなり、変生男子) / 随筆集『閑田耕筆』(変生女子、変生男子) / 随筆集『桂林漫録』(変生女子、『閑田耕筆』と同話) / 艶本『好色変生男子』(変生男子、両性愛) / 随筆集『随意録』(変生男子、『和漢奇事変生男子之説』にも採録) / 随筆集『街談文々集要』(変生男子、『半日閑話』と類似) / 随筆集『其昔そのむかしものがたり談』(変生男子) / 随筆集『聞きこの任』(ふたなり) / 雑史『増訂武江年表』(ふたなり、『聞の任』と同話) / 記録『見世物雜志』(ふたなり) / 随筆集『甲子夜話』(変生男子、『半日閑話』と類似) / 随筆集『中陵漫録』(変生男子二例、一例は『閑田耕筆』と類似) / 随筆集『北窓瑣談』(変生男子二例) / 随筆・拔書集『視聽草』(変生男子二例、『随意録』『半日閑話』と類似、『和漢奇事変生男子之説』にも採録) / 随筆集『兎園小説余録』(男装者・女装者・変生男子・ふたなり) / 艶本『色道禁秘抄』(ふたなり二例、変生男子二例、後者は『北窓瑣談』『兎園小説余録』と類似) / 随筆集『閑度雜談』(変生男子)

まず、銀鷄の著した『和漢奇事変生男子之説』が、このような「ふたなり」「変生男子」「変生女子」説話群の最末端に位置していることを確認しておこう。つぎに、先行説話群の多くが、随筆集に収められていることを認めねばなるまい。随筆集の作者は、逸脱する性の多様なあらわれを「奇」なるものとして捉え、日常性によって染めあげられたその他の随筆諸項目のなかに埋め込んでいく。このようにして多くの「随筆集」は誕生したのであろう。この限りでは、逸脱する性、すなわち「奇」なるものは、日常性から突出している。場合によっては、男と女という性のありようを自明のこととしている日常性と対立することもありうるだろう。また、逸脱する性を「奇」としてたんに記録したのでは、「文学的想像力」を働かせた営為とはいえない。それは、どこまでいっても「奇」の記録の断片でしかないのである。私たちは、そのような随筆集から任意に「奇」の記録——もちろん「奇」以外のほかのテーマでもよいのだが——を引きだし、自分に都合のよい言説を組み立ててきたといつてよい。上掲のような随筆集をあつかう困難さはここにある。それらは、まさしく「文学的想像力」以前の作品群なのである。

銀鷄は、先行する説話群のもっているそのような特質を熟知していたのであろう。その上で、二段階のステップを

翻刻 和漢奇事変生男子之説

踏みながら、「ふたなり」「変生男子」「変生女子」説話を「文学」にまで高めようとしたのではなかったか。第一に、「ふたなり」「変生男子」「変生女子」説話群を蒐集し、「性的奇談集」としてまとめあげること。これによって、一時的に「奇」は日常性から切り離され、絶対性を具備する。換言すれば、銀鷄は「性的奇談集」によって、男と女という性のありようを自明のこととする世界に対し、逸脱し、反乱し、自在に流れつづける性の世界がまさにそこにあることを提示したことになる。第二に、この絶対性を具備した「性的奇談集」をもういちど日常性のなかに突きもどしてしまふということ。『和漢奇事変生男子之説』から言葉をかりるならば、「ふたなり」「変生男子」「変生女子」の話など、「爰^{こゝ}にも有^{あり}、かしこにもさる事有^{ことあり}」「まのあたり、そこく^{こゝ}にあり」といきつてしまふのである。これは、日常を「奇」によって埋めつくしてしまふといいかえてもいいだろう。「絶対」なるものが、日常に、世界中に散らばり、横溢するのである。ここに、男と女という性のありようを自明のこととする世界は崩れ去った。性の狡知——常に逸脱し、反乱し、自在に流れつづける私たちの性は、このようにしてそのあるがままの姿ですくいとることが可能になったのである。銀鷄の「文学的想像力」とは、したたかな性以上のしぶとさを備えもっていたといっておくべきであろう。

『和漢奇事変生男子之説』は、上巻と下巻に「変生男子」説話六話、「変生女子」説話二話、「ふたなり」「はにわり」説話三話（明確に「ふたなり」「はにわり」と判断できるのは二話）を収録し、中巻には中国の事例と自然界の事例を収めている。この組み立ても「文学的想像力」に富んでいるといわねばならない。上巻で「変生男子」説話を語り、中巻では「奇」を相対化するために中国の事例を紹介し、さらにその相対化を徹底すべく自然界の事例にも筆をおよばせている。自然界の事例、また自然の一部としての「変生男子」「変生女子」「ふたなり」の事例に対する評言^{まこと}も射たものとなっているが、これには医師としての経験が反映されているであろうこともいいそえておこう。そして下巻では、「変生女子」説話が語られ、クライマックスともいえる「ふたなり」「はにわり」説話は最後尾に配されている。上中下と読み進めていくと、まず「奇」が提示され、その「奇」が相対化され、最後にあらためて「奇」が再提示されていることがわかるだろう。その結果、「奇」が「奇」でなくなる、つまり、私たちは私たちの日常が「奇」

によっておおいつくされていることを知るにいたるのである。

『和漢奇事変生男子之説』を「性的奇談集」「両性具有文献集」として定義づけようとする本「解題」の役割はほぼ果たした。それでは、銀鷄によってあらわにされた、逸脱し、反乱し、自在に流れつづける性とは、私たちにとって一体どのような意味あいをもっているのだろうか。それが性的な混沌をさすものでないことだけは、はっきりとおかねばなるまい。もういちど『現代セクソロジー辞典』の「両性具有」「半陰陽」の定義にもどろう。厳密にいうと、『和漢奇事変生男子之説』で紹介されている「変生男子」「変生女子」「ふたなり」は、性転換症の男女と真性半陰陽に該当している。これ以外の逸脱した性のありようとされている、両性愛の男女、半陰陽の男女、同性愛の男女、服装倒錯者も、実をいうと「変生男子」「変生女子」「ふたなり」と深くからみあっている。いや、もつというならば、「両性具有」「半陰陽」として定義される多様な性のありようは、お互いがお互いに入れ子細工のように結びあいながら、男と女という性の自明性に律せられた世界とはまったく異なる、別の性の世界を形成しているのである。

『和漢奇事変生男子之説』をもう少し広いフィールド、すなわち性にかかわる日本の「文学」のなかにおいてみよう。先ほど「ふたなり」「変生男子」「変生女子」説話群から留保しておいた『古事記』『源氏物語』『とりかへばや物語』『有明の別れ』などからは、半陰陽の男女、服装倒錯が引きだせるだろう。また、両性愛については前掲『好色変生男子』をあげることができるし、同性愛については、多くの衆道文献が残されていることは周知のとおりである。春本・春画・好色本——古典至上主義さえ克服できるならば、さらには「文学的想像力」の隘路におちいりさえしなければ、私たちは逸脱し、反乱し、自在に流れつづける性を身体性に即したままでつかみだすことのできる「文学」的な素材をいくらかもっているのである。そして、それらは『和漢奇事変生男子之説』が拾い残した多様な性のありようを語ってくれることだろう。銀鷄が、それらの素材すべてに通暁していたと確証をもっているつもりはない。しかし、銀鷄が意識していたにせよしていなかったにせよ、『和漢奇事変生男子之説』はそれらの素材の集約点に位置しているのであろう。そこから俯瞰できるのは、男と女という二元論を超越した、あるいは男と女という二元論をのみこんだ、多様な性のありようが入れ子細工のようになった世界である。

翻刻 和漢奇事変生男子之説

銀鷄が『和漢奇事変生男子之説』を上中下の三巻に編み、その最後に、明らかな「ふたなり」「はにわり」の事例である「文字久米」と浮世絵師の女弟子の説話を配したことは暗示的といわねばならない。彼女たち（彼女）は、一ヶ月のうち十五日間は男もしくは女で、あとの十五日間はその逆の性に転ずる存在である。半月ごとに性を転換させながら、無限にそれをくりかえしていく「奇」なる者——これこそが、銀鷄が『和漢奇事変生男子之説』の究極においてみだした「絶対」なるものであった。彼女たち（彼女）は、自らのうちに「男↓女↓男↓女↓男↓」というかたちで無限に性を循環させていく原理をもっている。この無限の性の循環は、自らの部分としての真性半陰陽、性の転換、両性愛、同性愛、服装倒錯などすべての逸脱した性を生みだしていく。「両性具有」でもなく、「ゆらぎの性」でもなく、「多性」でもない、「循環する性」の発見である。最後にもういちどいっておこう。私たちは常に逸脱し、反乱し、自在に流れつづける性の世界に生きている。それは、男と女という二元論を自明のこととする世界ではない。ひめやかに、そしてしたたかに無限に循環しつづける性は、今も「まのあたり、そこくにあ」るのである。

書誌および底本・参照本について

現在所在が判明している『和漢奇事変生男子之説』の写本はつぎの二本のみである。

一、無窮会専門図書館本（神習文庫、井上頼圀旧蔵本）Ⅱ底本として使用

三巻一冊。表紙には題箋がなく、直接「和漢奇事変生男子之説」の表題を記す。表題の横に「原本」の筆書き記載があり、「作者自筆」のラベルが添付されているところから、「自筆稿本」と推測されている。各巻の表紙は題箋を有し、いずれも「和漢奇事変生男子之説」の表題。「和漢奇事」が角書であることは、表紙・各巻ともに共通している。畑銀鷄著。安政二（一八五五）年成立（「文盲散人」の署名がある自序による）。「無物老人覚」の序（「変成男子之説序」と記す）と、「平亭のあるじ銀鷄」という署名のもうひとつの自序を有する。『国書総目録』が分類を「仏」としているのは誤りである。

二、静嘉堂文庫本Ⅱ参照本として使用

一冊。表紙は題箋を有し、「変成男子之説」という表題を記す。表紙題箋に「和漢奇事」の角書はない。『国書総目録』が、角書を「鬼子母神御利生」とするのは、上巻巻頭に相当する部分に収録されている、「さと」の事例の「一枚摺の錦絵」の表題である「鬼子母神御利生変生男子」の割書を誤認したもの。巻別編成はくずれかけており、上巻・下巻に相当する箇所には表紙・扉はなく、中巻に相当する箇所に「和漢奇事変生男子之説」という扉があるのみ。筆録者・筆録年代ともに未詳。『国書総目録』が分類を「仏」とするのは無窮会本と同。無窮会本を「自筆稿本」とする前提に立つと、巻別編成のくずれをのぞけば、本文・挿図ともに忠実に筆写されているといつてよい。本翻刻では、静嘉堂文庫本を参照本に用い、底本とした無窮会本と対校したが、「校異」を掲げるほどの異同はないと判断されたので、いちいち注記は行わなかった。

校訂凡例

一、本稿は、畑銀鷄の未刻資料である『和漢奇事変生男子之説』を翻刻したものである。翻刻底本と参照本はつぎのとおりである。

底本……無窮会専門図書館所蔵本（神習文庫）Ⅱ伝自筆稿本

参照本……静嘉堂文庫所蔵本

一、本文整定に当たっては、原態を忠実に伝えることを旨としたが、読解の便をはかり、おおむねつぎのような方針をとった。

- 1 改行は原則として底本に従うようつとめた。ただし、長い段落については適宜改行をほどこした。
- 2 本文に一行あきや字下げなどの処理をほどこして判読の便をはかったが、これは底本の様態には制約されなかった。
- 3 句読点を付け、引用文や会話文などについては適宜「」を付した。また、書名には『』を付した。
- 4 漢字・仮名の字体は、一部の例外を除き、原則として今日通行のものを使用した。
- 5 仮名には清濁の別を付けたが、これは底本の清濁には制約されなかった。
- 6 仮名遣いは底本のままとした。
- 7 底本の振仮名は必要と思われるもののみ存置した。そのさい、振仮名の仮名遣いは底本のままとした。

翻刻 和漢奇事変生男子之説

- 8 底本の本文には、文字の左右に振り仮名が付されている個所があった。この場合、組版上復原が困難であったため、振り仮名は当該文字の後ろに「」でくくって二行割にして組み込んだ。
- 9 底本の振仮名には平仮名と片仮名の別があったが、すべて平仮名に改めた。
- 10 底本の振仮名の一文字の踊り字はそのまま存置したが、二文字以上の踊り字は通常の表記に改めた。
- 11 校訂者が新たに付した振仮名は平仮名・旧仮名遣いで表記し、踊り字は使用しなかった。
- 12 底本の捨仮名は、不自然にならない範囲で本文扱いとした。
- 13 漢文体部分には必要に応じて返り点を付した。また、必要と思われる箇所には読下し文を「」に入れて補った。
- 14 底本の割書は例外をのぞき「」に入れて一行組とした。
- 15 底文中の挿図については存置するようつとめた。
- 16 明らかな誤記・衍字は原則として訂した。
- 17 破損・汚損などによる、底本・参照本の不具合で判読不能な部分は、該当する文字数に応じて□を補入した。

【追記】

本翻刻は、平成九・十年の二年間、専修大学における総合科目のテキストとして使用する過程で整えられていったものである。この特殊な資料を用いた講義を辛抱強く聴いてくれた学生諸君に感謝申し上げておく。また、本文の校訂にあたっては、武田由紀子氏のひとかならぬご協力をあおいだ。ここに銘記して感謝の気持ちをささげておきたい。最後に、翻刻にあたり底本の使用をご快諾いただいた無窮会専門図書館にも深甚の謝意を申し述べておく。

和漢奇事変生男子之説

和漢奇事変生男子之説 上

変成男子之説序

瓊矛さかほこの滴瀝したたり島となり、毛穎ふでさきの垂落書したまりふみと成る。彼は神代かみよの虚談いつはりにして、此は人の世まことの実説まことになん。是をしるし、はたれ候、金鶏こらう故老の息子にして、昔と変りて緑髪くろかみも、今は黄髪しらがの親父おやぢと化る、銀鶏翁あみの編あみたる也。其宗源ゆゑよしは奈何いかなるや。此大日本の武蔵の国、江戸の西なる牛込の、酒肆さけうりの爺尊と、のみこと、媽尊か、のみことの二柱、夫婦ふたばしら媾みと合せられしより、彼銚端かのほこさきの点滴したたりて、生る女児なれは何頃いっしかに、碓おの駒ごろ盧島ろしまの男子をのこと変しを、神ならぬ身の知ざりし。阴戸かくしのあな（研）にゑや、美麗少女うましをとめと寵愛いづくしみ、躰そだて育ひとて長とな（生）り、たらぬが具なり賸なりぬる縁由いはれをば、聴きくに随まかせて録しるされたる、世に希めづらしき次第しだいにして、是は這回このたびの新版なりけり。

時は安政二年乙卯六月上じやうくわん澣、四日市場みせだなの小店ひまにて、活計なりはひの隙ひまなき間に筆いとまを把とる。

書僧ふるぶみやものなしのおきなさむる無物老人むぶつらし覚めづらし戲述めづらし 印

〔自序〕

此書、おのれが手にて製する処十五部は、木に竹をつぎたる如きあやまりも有まじけれど、其余の製本に至りては、好事の人々、夫からそれへ写しとり、或は貸本屋へひさがため、冊数をふやして五卷となしたるあり。密に是を開き見たるに、誤字、落字、かな、てにをはのたがひしはいふも更なり、自他の分らざる処儘あり。こは、おのれがあやまちにしもあらねど、聊いさみ虚名いさみを誌し置ぬれば、赤面のすぢなきにしもあらず。四方の諸君、よろしく察し見給

翻刻 和漢奇事変生男子之説

ひてよ。

安政二つといふ年の六月

はつかまりいつか

廿日五日にしるす

文盲散人 印

〔自序〕

変生男子へんじやうなんしの話、紛々として世に喧かまひし。能其実地よくを探り見るに、牛込神楽坂上若宮町うしごみ、居酒屋又蔵娘里事みざけや、弥いよいよ是に相違なきにより、公へ御届ごとけしよになりたるよし。其届書とまげしよを持来りて、密ひそかにおのれに見せし人あり。扱さては正説せいせつに疑ひなしと思ふ物から、例の入ざる穿鑿くわさく好み、高坐かうざにあらぬ好事かうづの一切、鳥渡皆さん見ておくれと、木戸口から袖ひつぱりを引張、それがしは、

平亭のあるじ銀鶏 印

鬼子母神 変生男子
御利生

安政二卯年五月二日、御届に相成候、牛込御門外かぐら坂上若宮町、居酒屋世遠州屋又蔵と申者、夫婦むつまじく暮しけるが、一子なきを憂ひ、女房お松、鬼子母神きしほじんに誓願をかけ、日夜の信心怠ることなし。依よ之、神もあはれみ給ひけん、つひに妊娠なし、女子うみを生けり。父又蔵、歎いていふ、「一子を授け給はる事有がたけれども、女子にてはたのもしからず」といふに、妻はせんかたなきま、お里と名づけ育てけるが、早十二才に成しころ、右のよしをかたり聞せければ、お里もくやししくおもひ、「女とても男にならざることやある」と、又鬼子母神を祈りける。然るに其年、同町なる手跡の師へ遣し置ける内、右里が一念の祈誓にや、次第に男根生じなんこん、既に今年に至り女根にょこんは形なく、全く是、

変生男子へんぜうなんしとなりける。仏説をもていふときは、妙法の『現利益他經』げんりやくけきやうに「不説等益即仏」ふせつとうやくそくぶつの大徳と云べし。斯も目出度事ゆへ、あらましを記しはべる。

又蔵娘さと事、改名文吉（年十五歳）

銀鷄云。此案文は、一枚摺の錦絵に記し有しを、爰に写し出す。此にしき絵、何かさ、はりありて、売ことを禁ぜらる。ゆゑに、此絵は見ざる人多かるべし。

又蔵娘里、十五歳の肖像

此肖像は、鍼医東菴はりいといふ者、手跡の師匠、秀鍛堂方しうかだうへ度々出入せしゆゑ、能その顔かたちをおぼえ居けるとて、吉

野屋長吉といふ人に写し遣はせしを、今又かりて再爰に写し出しぬ。

又蔵娘里十五歳之肖像

此肖像、鍼医東菴

といふ者の手跡の師匠

秀鍛堂方へ度々

出入せしゆゑ能

その顔かたちをお

ぼえ居るとて

吉野屋長吉と

いふ人に写し遣

はせしを



同里、変生男子おなじくとなり、文吉と名を改めたるときの肖像によし女子の男子に変ぜしは、いとく目出度ことなりとて、日頃懇意せし人々より、羽織、股引、足袋、せつたなど、祝ひくれ候よし。当人も甚はなはだ穩おだやかにて、あつぱれの若い者となりぬること、奇中の奇なり。

市中まちまちを売歩きたる、変生男子案文あんもんの写し。文字、仮名等、其儘をしるす。

それ、天下にめづらしき事おふしといふども、此度の次第、又となきことゝもなり。頃は安政二、五月二日、

翻刻 和漢奇事変生男子之説

同里豪生男子なり文吉と名と
伎ももの肖像

女子の男子を宴せし。

いふ月をたこと

なりて。日頃

懸念せし人なり。

初蔵股引足袋をいふ。

ほいれり。常人も甚極なり。

いふもの若者なり。奇中の奇なり



女子の男子とあらはれしことをたづぬるに、牛込若宮丁、居酒屋又蔵娘おさと、申者、十二の頃より、いづになき男のよふ成言葉にあいなるといへ共、両親は心づかずありしが、娘をかはゆがり、よなく母にかはりだきねいたし候下女、玉門のさね、一物となりしを見出し、密々主人へ其よし申きかせしゆへ、又蔵驚き、其旨早々然るべき処へ御届申候へば、御ほめにあづかり、「里次郎」と名をくだされしよし、祝ふ事かぎりなし。めづらしき次第也。

牛込若宮町

清五郎店

又蔵娘

さと

当卯十五歳

右さと儀、去寅年七月^{さる}中、市ヶ谷田町三丁目家主（名前不^レ知）、手蹟指南秀鍛堂遊山^{しょうかだうゆうざん}事、よしと申者方へ奉公に差出置、当三月中暇^{いとま}を取、又蔵手元に差置候処、さと儀変生男子に相成候趣、風聞、事実取調候処、父又蔵儀は遠州城東郡掛川在出生、母さよ儀は相州平塚郡馬渡村出生の由にて、十六、七年以前より、右若宮町清五郎店に住居仕、元は時々物売候て在^レ之処、当時居酒屋渡世致し、家内四人暮しにて、娘さと儀は十五ヶ年以前、天保十二丑年出産致し、尤同人は惣領にて、二男は松之助と申、当年八歳相成候弟有^レ之。娘さと儀、十一歳の頃より、夜歩行^{よあるき}又は力業^{ちからわざ}抔いたし、常々女子と違ひ、立居振舞等至て荒々敷、生得男子^{しやうとく}の様成氣質に有^レ之処、去寅年七月中、前書秀鍛堂よし方え奉公に

差出候処、同人方に内弟子にて、十五、六歳に相成候まさと申者寐所え、又蔵娘さと儀両度迄罷越、「密通可致」と内々申ける故、まさ儀納得_レ致、女にて右様の儀仕掛候は不審に心得、かのまさ事、師匠よしえ委細相咄し候に付、さとの臥_{ふせ}り居候節、夜着をまぐり見候処、常々女子とのみ存居候さと儀、男根有_レ之候間、驚入、同人え様子相尋候処、「十一、二歳の頃より男根相催し、両三年前より男に成候」旨、「母さよに相咄候へば、しかられ候故、其儘打過_{うちすこ}し置候処、此節全く男子に成申候」旨、当人申候に付、当三月中、秀鍛堂よしより暇さし出し、又蔵方へ連帰り候得共、両親共右始末信用いたし兼、娘さと臥_{ふせ}り罷在候節、相改見候処、陽根、陰囊共に全く出来候故、驚入、又は深く歎き、又蔵に母さよ相談の上、母さよ在所へ相預け候積りに夫婦相談致候を、異見等差加へ候者も有_レ之候に付、母さよ在所へ遣候儀は相止め、当月四日、娘さとの前髪剃落_{そりおとし}、名は文吉と相改、男の姿といたし、渡世向手伝為_レ致候処、追々右の風聞承り伝へ、酒食に罷越し候者日々多く、此節渡世殊の外賑々敷由。中にも、娘さと事、文吉え近付に相成候者有_レ之、近辺御武家方等へも被_レ相招_二候由。

一、陽根の儀は陰門の上に相生じ、陰門のふちふくれ陰囊に相変じ、玉も出来候由。至て色黒く、いまだ陰門の形ち失_{うせ}不_レ申、ころ柿の様にて、陰囊二ツ有_レ之様相見へ、毛も沢山に生じ、折々発動_{きざし}いたし候儀も有_レ之由。且、両三年前迄も乳大きく候処、追々小さく相成、此節相形_{あひがた}に成り、言舌_{ごんぜつ}、筋骨共男子の如く相変じ、全く変生男子と申にも有_レ之由に御座候。

右は稀成珍事_{まれなる}に付、再_{さい}応_{おう}風聞取調候処、実事の趣に付、奉_二申上_一候。以上。

安政二卯年五月

牛込若宮町清五郎店

居酒渡世又蔵娘

卯十五歳さと

右又蔵儀、年来当処に罷在、右渡世當居、天保十二丑年中、右さと儀出生いたし、平日男子の様成氣質に御座候処、

翻刻 和漢奇事変生男子之説

去寅七月中、市ヶ谷田町三丁目、秀鍛堂と申手習師匠の方え奉公に差遣候処、さと儀男子に相成候よしにて、暇出、当時又蔵手元に罷在候。右さと儀、当春中より次第に陰門相変り、男根、陰囊生じ、乳其外相形に、言舌〔ごんぜつ〕共男子に相変、全まづ変生男子の趣に御坐候。

卯五月初日

牛込若宮町清五郎店

居酒渡世又蔵娘

さと卯十五歳

右の者儀、生得男子せうとくの様成氣質に有レ之候処、去寅年七月、市ヶ谷田町三丁目、秀鍛堂と申候女子にて、手蹟指南致申候者方へ奉公に出し置候内、右秀鍛堂縁者にて、奉公人同様に引取置候拾五歳に相成候娘有レ之、夜分はさとと二階同居に打臥居候処、同人儀、兎角戯たはぶれ候様子にて、騷敷候間、秀鍛堂竊ひそに右の娘へ相尋候処、「さと儀、夜分ふせり候へば、只々戯れ候事致しか、り、誠にうるさく、折節熱き物をあて、甚気味悪く候」旨相答候に付、秀鍛堂儀、当三月上旬、深更〔しんかう〕に及び、蠟燭を燈し、竊に二階へ上り、さと寐姿を得と相改候処、陰門の上の方へ陽根相発居候間、驚入候。去れ共、其夜は何げなく打過、翌早朝同人に取詰とりつめ、右様子相尋候処、「右は十才の頃より相発候へ共、誰へも相話し不申」旨相答へ申候に付、早々父又蔵方へ引渡候間、同人儀、猶又相尋候へば、「親ヤの儀に付、定めて存居可申」旨、「是迄改て何共相咄不申」旨相答、何の無頓着も体に付、両親始承り、驚入。乳は当三月上旬迄女の形に有レ之候処、此節は追々平らかに相成、男の乳の体に相変じ、言舌、手足共男の様に相成、陰門は追々内へ窪み込、内より小さき陰囊の様成品下り、全く男牀に相変じ候得共、髪飾は矢張今以嶋田髻まげに結罷在候。右は年頃にも相成候間、色情相発し、前書の次第に至り候儀と被レ存候。尤、追ては野郎にも致し可申やと風聞仕候。此段、入御聴置申候。以上。

卯五月初日

定廻り方何某より

届書

○正徳の頃、摂州兵庫の内、佐比江といへる処に、与助といふ獵師あり。其娘十二、三の頃に至りければ、何となく陰門痒く、是をかきても其痒取れざるゆゑ、母是を案じて、取草などして蒸温めければ、少しはかゆみも減じ候やうに覚えけるが、斯の如きこと一ヶ月に二度、又は三度位も起ることありて、甚難儀しける所、或老翁の進めに任せ、有馬の温泉へ遣しけるに、大に病氣に相応して、譬如何様に痒み発り候ても、右湯に這入候へば、早速に痒みもさり候よし。彼是三十日も湯治して、家に販りけるが、其年は一度も発せず、気分も宜く、当人も喜び、家内にて案心しける処、又々翌年の七月に至りければ、已前の通りの痒み再発して、居ても立ても居られぬ程に苦しみけるゆゑ、母驚きて取草をせんじ蒸して遣んと思ひ、其場に向ひみれば、こはいかに、陰門のふちふくれ上りて、饅頭を二ツに切て、左右より押付たる如くに見え、其下の方に小さき芋のやうなる物下りて、其尖より小水したゝる様子に見えければ、母娘に問ひけるやう、「何頃より此様なもの出来候や」と聞しに、娘こたへて、「四、五日跡に小用に至り候処、小用の出あんばい、処の替り候やうにぞんじられ候へば、能々此処を見定め候処、芋の如く下りたる物の尖より小用通じ候が、其通じ心至て快よく覚え候。四、五日跡迄は、此やうに大きくは是なく、指の先位に候が、今日は殊の外ふとり候。小水の多く出候ほど痒み軽く覚え候」よし申ける故、母は弥驚き、夫与助にも有の儘に話しければ、与助も驚きしが、奇病故人にも語らず、神信心などして四、五日捨置し処、痒みは次第く減じけるに、彼芋の如き物、日ましに肥ふとり、日数三十日も過候へば、全く陰茎の形をなし、脹れ上りたる陰門は、脹の引に随ひ、だんぐと縮みて、腫物の瘡ぶたの如くかたまり、ぼろろと落けるとか。然るに、尼崎に与助の親類にて、鍼治を業とする老医有けり。或時、此事を初めより終りに至る迄、委く咄しに及びければ、彼医も驚き、其後娘の容体を診察しける所、「全く是は、変生男子に相違これなく候へば、此儘にて打捨置ては然るべからず。早々右の趣、所の役人へ相届申さるべし」との儀に付、与助も、「何様」とおもひければ、其趣落もなく、庄屋方へ参り相話し候よし。役所に

翻刻 和漢奇事変生男子之説

ても大に驚き、始終の様子一々書取、其向え相届候とぞ。此話は、俳諧師の松露菴再什が『枕の塵』といへる随筆に載たり。往々人のしる処なり。

○又、何の頃にや、上州伊香保の在に、間宮何某といへる浪人者ありて、手跡をもて村の子供に教へ、業として其日をおくりけるが、一人の女子あり。年十六の頃より、物事惣て男子のたちふるまひに同くなりけるゆゑ、人々不審に思ひけるが、其翌年、変生男子となりたるよし。伊香保の産、彦蔵といふ男の話なり。

○麻布六本木に、笹原玄鶴といふ眼科ありしが、一人の女子を持ち。玄鶴、殊の外寵愛して、掌の上の玉と愛樂みし処、七、八才の頃より、何となく男の子の様になり、毬、羽子板の遊びを独樂、風に替へ、とんぼをさし、蝙蝠を取などしてよろこびけるが、年十四の夏、疫病を煩ひ、大熱を発し、苦痛しけるゆゑ、玄鶴大に驚き、枕辺をさらず、自ら薬を煎じて介保などしけるが、日数七、八日もたちて、思ひの外熱解し、食など好みける故、家内のよろこびひとかたならず。然るに或時、娘父に向ひていふやう、「此ほど迄、何にてもかはりしことなかりしが、此熱を発しける夜より致し、陰門の下へ腫物吹出し、何となくこそ早く思へり。一目見て給はるべし」とて、前を開きて父の前へ出しけるに、其さま男子にひとしく、少しも恥る色なく、反りかへりて見せけるに、父も憫れたる顔して是を見けるに、陰門の左右尽くちみ上りて、其下より男根生じけるが、其さま全く十二、三の童子の陰莖の如く、皮半分むけて長短く、むけたる処の色紅の如くにして、光沢漆にて塗たる如し。玄鶴、是を見て大に驚き、「是、所謂変生男子にして、奇といふも余りあり。さればこそ、彼が行なひ、日月の立にしたがひ、男子にひとしきこと不審なる事なりと思ひしが、今ぞ疑ひはれたり」とて、其趣き親類をはじめ、極懇意の人々には、初よりの事共包まず咄しけるとか。此奇談は、享保四年七月の事なるよし。

爰に又、一奇話あり。享保十一年丙午の九月、四ツ谷鳩ヶ谷村に敵討あり。其起りを尋ぬるに、紀州の浪人高村五太夫といふ者、赤坂に借宅致し居、七十六歳にて男子四人持てり。皆々、御旗本方へ奉公にいだしおきぬ。

宮崎七郎右衛門殿御家来

嫡子 山崎善蔵

巨勢大和守殿御家来

二男 同善右衛門

青山藤藏殿御家来

三男 相良喜内

小出主斗殿御家来

四男 高村小弥太

右四人、奉公住み主名、左の如し。然る処、宮崎君に勤居候嫡子善藏事、当正月廿八日の夜、傍輩中野只八と申者と善藏口論に及びしが、其夜中、只八事善藏が寐首をかき切、何方へか出奔す。善藏父五太夫、老体にて無念至極と思ひけるは、残り三人の子供を呼集め、「某存命の内、善藏が敵をさぐり出し、打呉候」様、相頼み、猶亦申けるは、「我等頼まずとも、現在の兄の敵に候へば、討取事、申迄なく勿論の事に候。左あれば、其方共御主人へ願を指出し、御暇を申受、早々敵をさがし候様頼み候」との事。三人の者共、「委細畏り候」連、各主人へ右の趣願ひければ、「尤なることなり。首尾能本望をとげ候上は、必帰参致すべし」とて、皆々主家より拝領物など有、主人の心によりては、当町奉行諏訪美濃守殿へ御届に及ばれしもあり。扱、三人とも父五太夫宅に同居なし、日々敵の手掛り相尋候得共、其行方曾てしれず。善右衛門、喜内は相州曾我の社へ参詣し、「敵の行衛相知れ候やうに」と丹誠を拔んで祈りける。又、小弥太は一人の虚無僧に便りて、いと念頃にはなし合ひ、其上にて不斗はなしけるは、「近頃、御身の如き虚無僧になりたる者はこれなく候や」と尋ねければ、「左ればとよ、当月俄に虚無僧に相成候者、一人有之候。是は、一ヶ谷の令法寺より、布田の安楽寺へ頼み置候者にて、一ヶ月に一兩度宛は令法寺へ参候」と話しけるゆゑ、小弥太心中に思ひけるは、「若、其者にてはあるまじきや」と心付けれども、「遂に一度、敵只八の顔を見たることなければ、容易に事は計りがたし」と考へ居ける処へ、毎度目を掛けて遣ひし富藏といへる小者来りていふやう、「檀那様に極密御はなし申上度、わざと今日罷出候。其訳は別儀にこれなく、日々御苦勞被遊候て御尋なされ候兄御さまの敵只八殿は、只今四ツ谷辺に隠れ居られ候が、御兄弟衆の手分して尋られ候事を漏聞れ、『今は御当地の住居不安心なり』とて、虚無僧の形にて江戸表を立退候やうす也。定めて明日は出立の様子に見受候へば、鳩ヶ谷村にて御待候はゞ、一筋道なり、必間違あるべからず」と咄しける。小弥太は此話しを天へも上るこゝちにて、其喜びたとへんに物なく、脇々へ尋に出ける兄共を呼寄、右の趣を相話しけるに、いづれも大によるこび、夜の明るを待兼、三人共に仕度調へ、富藏を横目に頼み、鳩が谷村へ急ぎ、松の木蔭に身を忍び、今かくと待処に、斯とは知ず只八は、天蓋深く打かぶり、

翻刻 和漢奇事変生男子之説

虚無僧仕立の旅支度、道を早めて来る処を、松の木陰に扣へたる三人の兄弟は、富蔵が目をもてしらすを見るより早く踊り出、兄弟左右に立分れ、「いかに只八、爾が為に黄泉に趣きたる山崎善蔵が弟共、兄のうらみをはらさんため、得より爰に待受たり。いざ尋常に勝負致されよ。尤、見れば無刀なり。脇差相渡し可申」といひければ、彼虚無僧のいふ、「是は正敷人違ひなるべし。拙僧事は、左様成者にては無之。必、鹿忽致されまじく」といひけるに、「然らば其方の天蓋を取るべし」といふより早く逃出しけるゆゑ、「こは比興なるしれものかな」と声を懸るよりひとしく、天蓋の上より切付る。斯と見るより、喜内、小弥太より切込けるゆゑ、何かは以てたまるべし、忽あだし野の露と消、あへなき最胡をなしにける。兄弟三人は、首尾能敵を討おほせけることゆへ、父五太夫の喜び一方ならず、各其趣を主人へ届ける処、主家にて満足におほし召れ、早速帰参仰付られけるとぞ。

扱、此篠原玄鶴といふ日医師は、高村五太夫の弟にて、篠原何某といふ眼科へ養子にゆき、其処にて出生せし娘、変生男子となりし後は、弥心強にして、中々眼科の跡を継べき心ざしなど思ひもよらぬやうすに見へける故、兄五太夫と相談なし、行々は武士に取立ん下心にて、五太夫方へ頼みければ、五太夫も承知にて、我方へ引取、母方の苗字を名のらせ、高村小弥太と改名させ、三男喜内が弟分にして、小出家へ奉公に出しける。是則、玄鶴が娘の変生男子なり。此娘の変生せしは十四才の時なれば、敵討に出しは二十一歳の時なり。此篠原玄鶴の物語は、岡田真澄翁の話なり。又、鳩ヶ谷村敵討の事は、松操軒何某の随筆『枯木集』第七卷目に出る。然れ共、玄鶴の娘変生男子となり、高村小弥太と名のりしことは絶て載ず。五太夫の四男、高村小弥太と斗りあり。

上総の木更津在に、坂部外記といへる神道者ありしが、其娘を瀧と呼て、十一、二の頃、江戸小石川辺の去る御旗本へ奉公に出しける処、田舎育にこそあれ、一体の産れつきあでやかにて、何となく人好のする小女にて、見る人毎に賛ぬ者はなかりしが、此御屋敷に三年ほど勤め居たりし処、折しも六月の末、女御隠居の庭先にて行水をつかひ居られし処、俄に大夕立降来りて、雷鳴甚しければ、御隠居も驚き給ひて狼狽騒ぎ給ひけるを、かの瀧女、雨戸をくりながら此体を見るより、直様庭へ飛をり、御隠居の入給へる行水盥を、其儘にて掬側へ持上げるが、雷鳴最中のをりな

れば、誰一人此働きに気の付者なかりし処、雷鳴静まり候て人々心付、「御隠居様を御行水盥のま、御掾側の上へ持運びしお瀧が力量感心せり」とて、御殿中の評判となりしが、是よりして何となくお瀧こと、男のやうになり、物のいひざま、立ふるまひ、食事の様子等に至る迄、少も男子に変わる事なかりしが、首尾能此御屋敷を三年勤め、御暇を取り、国元なる木更津在へ帰りける処、其様す家に有し時とは大に異ける事ゆゑ、父外記も不審に思ひをり候処、十六歳の正月中旬、俄に陰門腫痛を發し、「疼痛堪がたし」とて苦みけるゆゑ、近所の医者、松田貞菴といへるを呼て其容体を述、診察をたのみける。貞菴、早々これを一覧しけるに、陰門の左右赤黒色に腫上りて、全く水氣を持たる如くに見えけるゆゑ、懷中より破鍼を出して、是をさし通しければ、煤水に少く血交りたる汚水、二合足らず出ける処、早速疼痛ゆるみて、ふきとりたるが如し。娘の喜び、外記の歎び一方ならず。然るに、其夜に至り、陰門殊の外痒く、何やら下りたるやうに思はれければ、早々厠に至り、塵紙にて是を引出さんとしければ、小腹へ引つりて痛甚しくおぼえけるゆゑ、父を呼起し、斯と告げれば、父驚き、手燭を照して是を伺ひ見るに、其色朱を懸したる如き男根、長さ三寸斗り突出せり。外記はおどろきながら、眼を留めて熟見れば、昼、貞菴の鍼にて水を取し処の陰肉は、尽く編み上りて椎茸の如くかたまりて、其中より男根下り出たれども、半分は皮をかぶり、馬口至て小さく、其穴漸錐の尖にて揉たる如し。然れども、小水十分に通じて、淋歴する気味更になしといふ。外記、心中に甚恥るといへども、造物者の為業なれば如何ともしがたく、後々は人にも話しなどするに、荻野梅塙翁、不斗此事を聞、頻に瀧女が変生男子を見まほしく思はれ、上総の社中、岩瀬与五右衛門といふ弟子を頼みて、遂に木更津に便船して、坂部方へいひ入ける処、先生の雷名を元より承り居しことなれば、坂部も余儀なく、□□「底本・参照本ともに欠字」儀に及ばず、其意に任せければ、先生大に喜び、以外の土産など持参して、昼八ツ頃、坂部が一室に入、瀧女を呼て其陰所をとくと一覽に及ばれしに、瀧女一向に恥る色なく、股を開きて十分に見せたりとか。翁、歎びのあまり、矢立を出して尽く是を写し、懷にをさめて帰られしとぞ。おのれ或日、梅塙翁を訪ひしに、雅談の序、不斗此奇話を聞り。先生、其時の図を出しておのれに見せ給ひしゆゑ、おのれも是を写さんとせしが、画心更になければ、「暫時借用して、男時習をしてこれを写さしめん」といへば、先生微笑して、「安き事なり」とて是を赦し給ひしをりから、谷文二の見

翻刻 和漢奇事変生男子之説

えけるゆゑ、其意を通じて頼みけるに、早速懷中筆を出して、是を写しくれぬ。然るに惜むべし、此図、文政十二年三月廿一日、神田佐久間町より出し失火に焼失せり。さはあれ、心覚居し儘を図して、好事家の一覽に備ふ。

○坂部外記娘瀧、十六歳の正月、変生男子に成

貞菴の鍼をさしたる後は、陰門のふち左右へ干すばり、椎茸のやうにかたまり、細き筋いく筋となくうかみ出て、末には瘡ふたとなりて、ぼろ／＼落けるとか。



此図は、陰門の下より陽物生ぜり。又蔵娘は、陰門の上より陽茎出しといふ。いかなる訳にて上下を分てるや。

皮をかぶらざる処は、朱をさしたる如く赤く、皮は常のいろに黒みをおび、馬口至てちいさきよし。

○陰門干堅り、陰囊を生ぜし図

梅塙翁の見られし頃は、陰囊のかたちは少しもなかりしが、夫より日数をへて、陰囊出来、辜丸も生ぜしといふ。然るに此変生、成人するにしたがひ、事の外なる多姪にて、身持あしく、夫ゆゑ止事を得ず、所を追ひはらひしとか。其後、いづかたへ行しかしれずときく。

銀鷄、木更津へ遊歴の折から、此事を人毎に尋

和漢奇事変生男子之説 中



けれども、一人もしりぬる者なし。只、藤右衛門といふ道具屋のはなしに、「文政年中に殊の外なる姪乱男ありて、所々の婦人をたぶらかし、所におきがたしとて、追払しといふ話を聞きこ」とあり。其余の事はしらず」となり。

銀鷄云。変生男子の事、中華にも儘有事と見え、夫々の書に載たる事最多し。今、おのれが見聞せし処を鈔録して爰に出しぬ。博覧の君子に問ば、此類数多あるべけれど、そはおのれが浅学の知ざる処なれば、我にひとしき好事の大人達、此後

○晋の干宝が『搜神記』卷の六に、魏の襄王の十三年に女子化して丈夫となることあり。妻を与ふれば子をなしたりといふ。又、同書に京房が『易伝』を引て曰。女子化して丈夫となる。是を陰昌といふ。賤人〔せんじん〕王となるなり。丈夫化して女子となる。茲を陰勝〔いんせう〕陽厥といふ。咎亡と。一曰。男化して女となるは呂刑濫る。女化して

翻刻 和漢奇事変生男子之説

男となるは婦政行はる、なりと。

○明の李時珍が『本草綱目』巻の五十二に、人魂の条下に、男生而覆き、女生而仰く。水に溺れても亦然なり。陰陽の秉賦一定にして、移らざるは常理也。而るに、男が女に化し、女が男に化することのあるは何ぞや。豈、乖氣の妖を致して、変乱常に反するならんか。京房『易占』にいふ。男化して女となるは宮刑濫る、なり。女化して男となるは婦政行はる、なりと。『春秋』潜潭巴にいふ。男化して女となるは賢人位を去る。女化して男となるは賤人王となる也。これ、人事を以ていふといへども、而も其臟腑、経絡、変易の微なる、測るべからざるなり。又、同書細注に引処七則

○『漢書』云。哀帝の建平年中、予章郡の男子化して女子となり、人に嫁して一子を産り。

○『続漢書』云。献帝の建安二十年、越雋の男子化して女子となる。

○李時珍曰。我朝の隆慶二年、山西御史宋繡が疏に言ふ。静楽県の民、李良雨といふものの、妻張氏といふを娶つて、已に四載矣。後貧苦にせまり、其妻を出し、自身人に傭はれたり。然るに、隆慶元年正月、偶腹の痛みを覚えて、時に作り時に止む。二月二日に初まり、九日まで大に痛て止まず。四月にいたりて、内腎囊おぼえず退縮て腹に入り、変じて女人の陰戸となり、次月は経水も又行る。始めて女粧に換たり。時に年二十八矣

○『晋書』に云。恵帝の元康年中、安豊の女子、周世寧といふものの、以漸化して男子となる。十七、八にして性気成る。

○又、孝武皇帝の寧康の初め、南郡の女子、唐氏なる者、漸化して丈夫となる。

○『南史』に云。劉宋の文帝元嘉二年、燕に女子あり、化して男子となる。

○『唐書』に云。侶宗の光啓二年の春、鳳翔郡郿県の女子、朱甌なる者、化して丈夫となる。旬日〔「とふかほど」〕にして死せりといふ。

銀鷄云。変生男子の説、実に理外の理にして、議論の沙汰に及ばずといへども、或西洋家に是を尋ねければ、「理外の理といふことは絶てなきこと也」と答へける故、「然らば眼前の変生男子、公へ御届になりし正実の事、少しも虚談にあらず。此理を審に解示し給ふべし。おのれは元来浅学なれば、其理を究むる事能はず。如何く」

と責けれども、西洋先生一言の答へに及ばず、「其理は此間に解べし」とて、そこく帰られたり。跡にておのれ考へけるが、「此究理、容易の腕には解尽すこと能ふまじ」と思へば、いとくをかしくぞおもはれぬ。変生男子の事、奇中の奇に過ぎたりといへども、深く是を考ふるときは、左迄の奇ともおもはれず。其理如何となれば、万物の霊たる人間、女子にもせよ、男子にもせよ、人間が人間に変わる迄のことにて、其体を外物にうつし、異形なる物に変ぜしにもあらず。因て思ふ、『五雜俎』に李徴蘭庭雍が妹、俄に化して虎となり、又丹陽の宣賽が母、化して亀となり、又太原の王含が母、化して狼となり、又呉生が妾の劉氏といふ者、一夜の中に夜叉と変じ、又李勢が下男、忽化して蛇となりたる由を載たり。此等のことをこそ、実に天下の奇事共いふなるべし。又云。晋の恵帝の時、京洛中に有人の中に、男女の体を兼たる者あり。能男女の両用の交りをなせり。人、是を半男女といふ。又、別に一人あり。是を石女といふ。女体もなく、男体もなし。一名、実に石女共唱へり。又近頃、聞毘陵といふ処の役人の妻、子の時より午の時迄は男となり、未の時より亥の時迄は女となる。其夫あはれみて、男となるときのために、妾を数人おいて使はしむ。其妾の中に、殊更寵愛を受て度々交合する女あり。此女、人に語りけるは、「更に常の男に替る事なし。唯、男根少し弱きやうに思はれぬる」よしを語りしといふ。因に云。晋の時、暨陽にある任谷といふ者、野に耕して居処へ、羽衣を着たる童子来りけるが、其さまいかにも美麗なるに心移り、口説寄て男色の交りをなしけるに、終に此童子、子を孕む。後、子を産んとするとき、又来りて男根の下を割て、一ツの蛇の子を産出せり。又、宋の宣和六年、薬を売男子、懐胎して女を産む。産に臨んで甚苦しむ。穩婆、秘術を尽すといへども叶はず。七人目に来りたるば、さまざま心力を尽し、漸にして産せたりといふ。又、異産においては種々あり。漢の竇氏が母、一ツの蛇、一ツの鶴をうむ。晋の抱罕の令嚴根が妾、一龍、一鶴、一女を産む。劉聰が后劉氏、一蛇、一虎をうむ。唐の大順年中に、資州の王全義が妻、懐胎して其体段々に下りて、足の大指折て、一つの玉をうむ。暫くあれば、其玉杯の大さになりたり。又、宋の潮州の婦人子を産む。大さ指の如くにして、顔、手足悉く有物を百余うむ。其外、異類をうむもの挙て云ひがたし。皆是、懐胎の内、

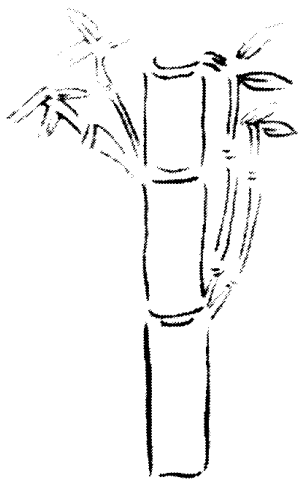
翻刻 和漢奇事変生男子之説

物に感じてかゝることありといへども、常には更になき事なり。

文化五年の秋、麻布六本木に井戸龍圓といへる医家有しが、其家の飼狗、五疋の子を分娩して後、四、五月たちければ、乳尽く腐散して落取れ、夫より此女狗、男狗と変じ、陽茎を生ぜしとて、其頃専の評判なり。己其頃、岡本玄治君の塾に有て、正しく聞し話しなれど、一見せしにはあらず。

又、戯作者感和亭鬼武の家にて、鶯を番飼ひけるが、二年程の間は、其時節くには尽く卵を産し処、其後月を渡り年を越ても、絶て産ず。鬼武も老鳥に成しゆゑに産ぬことと思ひ居たりし処、或朝、餌飼せんとて、下婢麤のしぼりかすを持来り、鶯の籠を開き見れば、今迄の雌の鶯、陽物〔へこのこ〕を生じて、筆の軸の如くにして、長さ六、七寸にも及びける陽茎を引ずりながら、籠より飛出しけるに、下婢驚き、大声上て騒ぎける。「何事やらん」と鬼武障子を開て様子を問へば、下女笑ひながら其意を告る。鬼武不思議に思ひ、鶯をとらへて能々見るに、全く陽物にちがひなければ、「希有の事なり」とて人々に話しけるを、己眼のあたり聞しことあり。

又先年、京摂遊歴の折から、浪花の煎茶家花月菴毛孔を訪ひ、此家に四、五日逗留せり。或日、浪花の名家兼葭堂石居、画家上田孔長、二人連にて来り、雅談の半、孔長主人にいふ、「先年、御教諭に任せ、社中〔でしやちゆう〕より女竹五本無心致し、例の書斎の庭へ植置候処、年々竹の子を生じ、既に先生へも呈せし処、いかゞ致せしや、一昨年より甚払底になり、昨年は漸二本、当年は一本も生じ申さず候故、不斗心付、親竹を能々見候処、二本の枝いつしか落て、一本の枝を生じ、全く男竹と成し様子なり。右ゆゑ、竹の子を生ぜざることを初めて知候」との話し也。おのれ其坐に有て此話を聞しが、孔長のいふ女竹、男竹の説、い



まだ心得ざれば、其意を問しに、孔長いふ、「女竹は親竹の節より二本となりて枝を生じ、男竹は親竹の節より一本となりて枝を生ぜり。是を以、其男女を分てり。

女竹、斯の如し。節より二ツの枝あるを植れば、女竹ゆゑ竹の子を生ずる事多



し。男竹は節より一本の枝を生ぜり。

男竹、かくの如し。節より一本の枝を生ず。男竹ゆゑ、竹の子を生ずること
 少なし。

此説、孔長の話しに寄ときは、女竹全く男竹に変ぜしに疑ひなし。然有時は、
 禽獸、草木、蟲魚の類に至る迄、変生男子といへることは、なきことにはあら
 ざるべし。浅草観音へ鶏の女を納むれば、日ならずして男鶏となるよし、
 「天地の間に産れながら、何にても知ぬといふことの有べきや」と思ひをこらす。究理先生、世中に満々たれども、
 中々もて、思ふ程には物事氷解らず。氣の毒千万、是非もなき次第なり。

或人云。「孔長の話に、女竹の枝二本折て、其跡より一本のえだを生ぜしといふ説は、甚疑ふべき事也。竹の枝は、
 草本の枝とひとしからず。一度折るときは、其節より又候枝を生ずるといへることは、決してなき事なり」と。
 おのれ、是に答へていふ。「何にも左の如し。然れ共、物の変に至りては一樣に論じがたし。文政の中頃、板橋の
 在にて、植木屋何某一本の大竹を切取りしに、其切残したる節より枝数本を生じて、恰も萩の枝の如くにはびこ
 りしこと、誠に不思議なりとて、板におこし市中売ありきしを、正しくおのれ一枚調しことあり。されば、其
 変に至りては、一を以論じがたし。是者、諸物に渡りて皆然ならん」。

前に挙る処の『五雜俎』の説に、宋の宣和六年、薬を売男子、懐胎して女を産む。産に臨んで甚苦しみけるを、
 七人目の婆、秘術を尽して漸出せるとの文法、扱此文にては、常体の婦人の難産を論ずるにたがひしことなし。
 此段は、男子が嬢妊せし処なれば、今迄の陽物が陰門に変ぜしとや。又、臍下へ穴が開しとや。何とか可とか、
 其断がなければ、子の産れし場処が分らず。場所が分らざる時は、産婆の秘術を尽して産せしといふ文も、い
 づかたより産せしにや、是又不審。いづれにも、子の産れいづる穴の論がなければ解しがたし。謝肇淞先生は大

翻刻 和漢奇事変生男子之説

学者の事なれば、此位このくらゐの事を誤る訳は絶てなきことなれど、如何いかして其論に及ばざりしや。「上手の手からも水が漏る」といへる諺は、かゝる事をやいふなるべし。

物の変化、種々なるを記す

銀鷄云。物の変化するに至りては、究理家といへ共、如何いかんぞ議論の沙汰に及ばんや。文化五年六月の末、おのれ上毛草津の温泉に浴すること二十日あまり、或日、友人のすゝめに寄、氷谷といへるに至りけるが、頃は七月の初めなるに、岩の間に降積りたる雪の、石の如くに堅固たるあり。人々打寄て、小石、木の枝などにて、是を打破し持帰りける故、おのれも同く雪を取んと思ひ、其場所に立寄けるに、諸木の枝覆重りて最闇く、寒氣膚を犯して、只野于玉の夜に異らず。漸明りの漏指処ありければ、探りさぐりて其処にいたり、石のかけたるを持て、しばく是を打ければ、漸にして茶碗の大きな雪を二箇得たり。直様手拭へ包み、友人とおなじく旅宿に帰りける。時早八ツ半過にして、七ツに近し。早々手拭を解て、彼雪を同者の人々に土産にせんと、少しづ、打壊て配りける処、一ツの雪の中より、小さき蛙の死たるが出たり。人々寄つどひ、「扱は寒氣にうたれ、雪の中に死たる物ならん。此雪は不浄なり」とて、蛙と共に盆の角に載置たり。然るに、友人善吉なる者、温泉よりかへり、濡たる手拭を丸め、我しらず盆の上へ捨置、又何方へか出行けり。此跡へ近所の遊客二人来り、酒宴を催ほし、談話半に至るころ、例の死たる蛙、手拭のしたより飛出して、坐敷中を反歩けり。人々、「これは」と不審しけるゆゑ、おのれも驚き、有し次第を事細に物語りければ、皆々不思議の思ひを成たり。寒中とは違ひ、炎暑の時分、いかに風土の替ればとて、時候にも寄物なるに、かゝる事のあるべきことかは。今爰にて蘇生そせい「いさかへる」するを見る時は、此蛙、寒氣の時分死たるにてはなく、炎暑の時といへども、雪の消ざる程の場処なれば、清水の流れに遊び居たりし折から、一時の冷氣にとぢられ、其上へ旧年の雪のこけ落て、これが為に包まれ死せし物なるべし。さはあれ、死して一日にもせよ十日にもせよ、氷谷の寒地を逃れ、草津の地に来り、蘇生せしは、全く温泉の暖氣を得たる徳とこそいふべけれ。

其後年を歴て、穿鑿せんさくの事有て『新著聞集』を出し見るに、是に似よりたることあり。雑事篇第十八に、信州高遠の藤沢作右衛門といふ者の下人、冬の日、薪たきぎを切けるに、節木ふしきの中に郭公ほととぎすの死したるあり。是は薬種やくしゆにもなるべき物なりとて、箱に入れて仕廻しわいおきしが、其後はふつに忘れて、翌年の三月の末頃に、彼箱かのはこを開きければ、件くだんの郭公飛出とびいでて去けるとか。されば、古歌に「奥山の朽木くちきにこもる郭公夏をまちてや子には鳴らん」と讀しは、秋より後春までは、朽木などの中に隠れ居をるにや。されば、此下人の取たる時鳥ほととぎすも、誠の死したるにてはなく、しばしが内、節木のうちに隠れ居たるものか。冬取て翌年三月迄、箱の中に蟄居いふかしせしは不審けれども、一名を冥途の鳥ともいへば、再蘇生ふたたびしたりしも、いやといはれぬ因縁なるべし。

是に因て、銀鷄不斗杜撰ふとづさんの説を思ひ出せり。今爰に載て、諸君の笑ひを求む。蛙かはづの大なるを蟾蜍ひきがへるといふ。千歳を歴たるものは、頭上に角つのあるよしを『抱朴子』に云り。又、『冷斎夜話』に、中貴楊戩ちゆうきやうせんといふ者、大なる蝦蟇ひきがへるに身を変じたることを記せり。又、『遠山奇談』に、大なる蝦蟇ありて、樵夫きこりを一息すひよせに吸寄し事を載たり。又、『浮世要草』うきよめぐさに転々齋てんでんさいといへる医者、赤蛙とらを取へて皮をむき、腹わたを出して糸にてしばり、軒につるし置しところ、四、五日過て是を見れば、括しばりたる糸は其儘有て、赤蛙は見え、「扱そのまは猫にても取しにや」と思ひ、其後は心も付ずありし処、彼赤蛙かのの皮をむき、腸はらわたを捨たる場所に、最大やかなる赤蛙の、目をばちくとして蹲踞うづくまり居たり。「扱かのは彼蛙いかはづの蘇生いきかへりたるにや」と思ひければ、身の毛もよだつばかりにぞつとせしが、「其実正を見届じつしやうん」と思ひ、蛙の側へ顔を出すや否、霧の如き物を吹かと思へば、其氣忽たちまち両眼に徹し、目暈めくるめきけるゆゑ、大に恐れて、其処を立去けるが、是よりして疼痛いたみ甚敷、色々治療ちれうを加ふるといへども、終に其験しるしなくして、盲目めしひとなりたることを記せり。されば、蛙といふものは、容易の虫けらにはあらず。和訓、かへるといふ訓は、全く死したるものもいきかへる、といふより名付し物にや。左あるときは、氷谷こほりだにの蛙も雪中に包れながら、実まことの死したるにはなく、雪の中に身を隠して、温暖氣うんだんきの至るを待たるものか、知べからず。郭公といひ、蛙といひ、最奇に過たる話しなれば、今爰にしるして、猶後人なほ（「このひと」）の極説きよくせつ（「くはしきせつ」）を待んのみ。

翻刻 和漢奇事変生男子之説

○上毛辺にて、芋虫を取へて柚の木に付置ときは、半月の内に、反鼻となるよしいひ伝ふ。何にもこゝろえぬ事と思ひ居たりしに、沢田其六といふ人、正しく其化する処を見たりといへり。

○上毛曾木村の雅客、中村環の話に、柚の木の虫を桑の木に移すときは、十日立ざるに、蛭に変わる事、度々試し事なりといふ。

○摂州兵庫札の辻といへる処にて、五八霜を殺して埋めければ、四、五日立て其処へ金光りの茸を生ぜり。人々見付て、「これは蛇の氣にて生ぜし物ならん」とて取捨ければ、一夜の内に、其跡へ挟虫の生しこと数限りなしといふ。兵庫の人、山田屋佐助の話なり。

○大岡雲峰翁の話に、煤払の日に、蠅の出しを打殺して捨ける処、飼犬来りて是を喰へ、木の根の側をほりうがちて是を埋、其上へ尽く土をかけて、度々鼻にてかぐやうすなりしが、其儘何方へか行去ける。翁、是を見て不思議に思はれ、度々其場所を氣を付て見られし処、日数十日ほども過て、其処へ稗のやうなる草、夥敷萌けるが、夫より四、五日のうちに、四、五寸程になりけると、彼犬来りて尽くこれを喰けるとか。蠅の死したるを草に成て食するといふ、犬の考如何ならん。感すべき事にあらずや。

○天和三年の秋、伏見の京橋酢屋与右衛門といふ者の庭の薄に、稲の穂を生じけり。人々見て奇異のおもひをなしたるよし、『新著聞集』第四卷目、奇怪篇に載る。

○寛政五年六月中旬、芝神明前通、荒物屋勘次郎といふ者、朝兒の種をまきし処、葉は朝兒にて、花は尽姫百合なり。人々、「奇也」とて評判せしとか。杉浦君の『靖斎雜記』第十二卷に出たり。

○天保二年卯の六月、武州二合半領松代村、升屋善右衛門と申者、胡瓜の種をまきし処、其蔓に茄子なりたり。余り珍敷事なりとて、道庭村といふ処の植木屋吉十郎といふ者、七月六日、江戸本所、石原狩野左京殿方へ持参り見せたる由、医家福寫道仙の話なり。

○尾州の藩士、想山齋主人の著す処の『想山著聞奇集』第五卷に、物の変化することを種々出せり。其中に、爵大



水に入て蛤はまぐりとなり、雉きじ又おほはまぐり蟹えびとなり、鷹化して鳩となるの類は、衆人の見る処にして、珍敷からず。蟹螯がうなの手長海老となり、田打蟹をかはの岡鰕虎魚ぜとなるの類は、物産家の誰やらんに聞おきたれども、余りの変化、不審にも思ひ居しに、予が友佐枝何某は、「我、尾張の国津寫にて、はね蚯蚓み、ずの蜈蚣むかでとなりたるを見てより、はねみ、ずがきらひに成たり」との咄し。又、鳥井吉右衛門も、「名古屋建中寺前にて、両度迄見たり」とて咄したり。予は名古屋にて人となり、只一度も変ずる処を見ざるゆゑ、かほどに慥たしかなる成話を聞ても、不審の事におもふは、予のみにもかぎるまじきか。依て、其半化の図を乞て載せ置なり。国により、所によりては、いくらも有ことにや、猶きかまほし。

鳥居吉右衛門の見たる斯の如き青み、ず、むかでの足はえ居たりと也。

佐枝何某の見たるは、斯の如く頭の方はむかでとなりて、尾の方未いまだみ、ずにして、足も頭の方はよく生じて、尾のかたはやうやく少生じ居たり。

又、或人の蛸あさりの蟹にあさり変じか、りしを所持するとの事を聞居しに、予が下男幸藏は愛知郡戸田村のものなるが、右村にては蛸は毎々蟹たがひとなることにて、「なりか、りも折々見当りて、珍敷からず」といふゆゑ、篤と聞に、「蛸の蛸からを佩おびたるなかに、肉細長く出て、其出たる肉に毛生はへて足となり、やがて蛸を脱して紫色を帯たる蟹となる」よし。又、右幸藏の親なる者のいふには、「蟹螯がうな邂逅まれには、手長海老となるものぞ、心を付て見置べし」と示されたれ共、幸藏は「一度も見ざりし」といへり。『莊子』の逍遙遊に、「鯢化して鵬ほうとなる」とのこと、偶言共いひがたき。造化の妙は、人智の及ぶ事にあらず。是も、幸藏の見たる変化へんげか、りの姿を同人に聞糺して、図し置ぬ。

翻刻 和漢奇事変生男子之説

虫鳥の変化のことは、『本草綱目』『三才図絵』等にも種々の変化の事見へたり。其内、或人の筆記に、下総の国香取の浦の嶋々に、鰻おそ沢山に居て、鰻ほらといふ魚の化したるのと嶋人の云て、鰻の腹にうすと云ものあり、鰻にも有といふ。又、蟹も此処に多く、鴈にほといふ鳥になりて、半分は蟹、半分は鴈なるもありといへり。此鰻といふは、海鰻かいだつの事にて、海鰻はとゞとも云て、鰻はとゞになるとは、土俗もいひ伝ふる事ながら、海鰻は海獣にして、鰻とは大にちがひたる物也。猶、其地にしばし住せし人に聞くに、「鰻の胡ヒョ獐ウにヒョ変じかゝりたるは、をりく漁人の網に入事なれども、必放し遣はして、捕来らざること也」との答へゆゑ、「其変じかゝりはいかなる物ぞ」と尋るに、「尋常の鰻の鱗の下に毛生出して、鱗の間より毛あらは顕あれ居迄にて、手の生かゝりたるや、頭などの胡ヒョ獐ウにヒョ変り居しは、絶て見申さず。并に、右の香取浦のへんに、とゞは居申さず。鱗の下に毛生じてより後は、住する場処を改る事と見えたり」と申せし。「其蟹の鴈になりかゝり候、一度も見受申さず」と申せし。猶、其土地の老、漁に出会であふを待て、委敷くはしく記しおくべしと思ふ。うすといふは、臍へそのことかと思はる。呉々も、造化の妙も、人智の及ぶ事にあらず。

銀鷄云。爰に挙る処の、鰻の腹にウスといふものあり、又鰻おそにもあるといふ。右ウスは、臍のことなるべしとの事、おのれ先年、尼ヶ崎遊歴の節、子供の蟹を取へて遊ぶを見るに、腹の方をさしてウスといへり。又、上毛の俗、沢蟹を捕て食す。腹に子のある処を指て、フンドシといふ。さすれば、ウスといへることは、何れ腹の辺をいへるか。猶、後人の極説をまたん。

同書にいふ。京師下加茂の摂社に、土俗、比良木大明神と称する社有。疱瘡の事を願ひて、願望成就の後、先は柞ひいらぎの木を上れども、外の木を奉る者も少からず。しかるに其木、皆柞と変化すると聞及びたり。予、天保九年戊戌いぬ、彼地に至りしとき、追々此社へも参詣よぐなし、能々見侍るに、神垣の内より五、六間もありつらん、種々の木あれ共、皆柞の葉を生じ、大体全木柞と成たる多し。其木、椿、玉椿、木穀もくこく、山梔子くちなし、檉かし、栢つげ、南天、木犀もくせい、白柳しらしやけ、正木まさき等、過半柞と変化なしかけたる分、或はいまだ捧げたるまゝにて、僅にいまだ変じかゝりたる分もあり。又、植たてにて、外にもやたらに植行者もあるに、悉ことごとくく変ぜし也。其内、右神垣の内に、接骨木はしこの木、三、四株も有。何れも接骨木

の葉を生じて、柎にならざるやうに見受たれ共、押合て植込たる中なれば、下枝等は柎となりか、り居しにや、し耽とは分り兼たり。玉椿、木犀杯は、木振、葉振など柎に似寄て有ものゆゑ、変化か、りたり見分がたきほどに、よき柎となり居つれども、くちなし山梔などは幹より小枝に至迄、さつぱりと木振も替り居れども、夫なりに薄き葉も厚めになり、其薄き葉に角も生じ居て、段々柎の葉に変化懸り居れ共、幹などの振合は其儘にして、木肌もいまだ其ま、なるも多し。中にも、小さき南天は別して沢山に納め有て、いまだ少も変じか、らざる木も多かりしが、元来南天は木振、葉ぶり大ひにちがひ居けれども、夫なりに葉に角を生じて、柎の葉となり居たり。其様子、書解がたきま、かたちばか形斗りなれ共、図となしてあらはし置たり「底本・参照本ともに図欠」。

○隣家の鈴木某、予が上京せしより、僅二年及びも早く、彼地へ参詣して見来るには、「じやくろ柎ありて、花も盛りに咲居たれども、葉は過半角生は出、柎と成至るは別してふしぎなり」とて、能々たしか慥に見来り、驚きて咄したるをし耽と聞留置しゆゑ、「其木は有か」と心を留て尋ね索れども、もとむ柎榴の変じたるは一株もなし。最早もはや悉く変化して、柎となりし物也。

扱、此神の事は『都名所図絵』等にも見えぬ。何の神におはしますにや、人に尋ねても只「比良木明神」と申事のみ知り居て、近來京地にては、千社参り杯いふこと流行なし出して、此神も其内にて、参詣人多く、衆人の知る社なれども、神体は分り兼たり。依て、猶社説の趣をねんごろ懇に聞きさぐるに、「祭神は素盞鳴尊すさのをのみことにして、延喜式内の御神にて、すなはち則出雲井於神社也」といへり。大嘗会、新嘗会の御神事、みあへの祭にあずか預りおはします御神にて、地主の神にして、此御社より西、今の京に至りて、出雲大路、又は出雲の郷など申地名も、此社より出し旧号のよし。

文徳天皇仁寿三年の夏、四月疱瘡流行、人民疫死するもの多く、此時、勅使此社に参向の砌、みきり神人に神が、りおはしまし、「れほこ疱瘡の疫神祓ひ除くべき」託宣おはしまして、比良木大明神と仰ぎ奉るべきよし。「比良木は、比々良木、比礼矛等の縁語におはします」と、右社の旧記にも見え、又「除夜に人家の門戸の上に柎の枝を差、疫神を避しも、比良木大明神の託宣也」と申伝へしよし。今の世に至りても、小児の疱瘡のうれひを除かんと、人々此神に祈願をすれば、必其しるしありて、疱瘡軽しと也。兎も角も、目の当りま万木柎と変化するを拝し奉る上は、神慮の空しからざる

翻刻 和漢奇事変生男子之説

事は申も愚にて、いとも尊き御事也。

銀鷄云。比良木大明神へ諸願成就の節、諸木ををさむれば委く柊となること、神慮の然らしむることとはいひながら、実に奇といふべし。爰に因て、又々奇説を載。余が家三代は、今王路家の門弟にして、男時習に至る迄、医を業とすること九代、然るに『道三切紙伝』といへる秘書を蔵せり。其中に、「柊葉大明煎」と称する奇方有。此方、疱瘡起張〔きぢやうやまあけ〕せざる時と、瘡疾〔おこり〕落ざるとき、只一貼を煎じ服する時は、其効神の如し。實に是、奇中の奇にして意外に出。密に思へらく、此「柊葉大明煎」の方名は、比良木大明神の神託にてもありもやせんか。猶、追て考ふべし。

○信州岩村田、緑川何某が家にて、女猫の子を貰ひ育し処、其後さかりつきて子四疋を産り。夫より一年ほどたちて、此親猫乳尽く腐れ落て、男猫となり、陽物を生じ、さかり尤甚しかりしといふ。此話しは、信陽諏訪侯の藩士、吉田靈鳳の物語也。かゝる奇談、枚挙するにいとまあらず。然れ共、西洋家の諸先生、一々是を究理すべきや否。造物者といふ役人を頼ずば、口開きは六かしからん。理外の理といふ古説をも、助け置度物ならずや。

○前に挙る処の転々齋といふ医師、赤蛙の氣に当り、苦痛せし話に彷彿〔はうふつ〕たることあり。今、因て爰にいふ。備後の福山の家中に、内藤何某といふ人あり。或時、庭に出たりしに、烏蛇を見付たりしかば、杖もて強く打けるに、其まゝ走りて草中に入りければ、草の上より頻に打て尋ね求めけれども、遂に見えず。暫程へて、奴僕見当りて、「草中に蛇死し居り」と告しかば、内藤出て、杖もてかきのけんとしけるととき、其蛇頭を上、内藤にむかひ烟草の煙りの如きものを吹かけけるが、其煙り内藤が左の眼に当りて、蛇は其まゝ倒れ死しける。内藤が眼、俄に痛みはれあがり、寒熱出て、苦惱いはんかたなし。既に命も失ふべく見えしほどに、内藤烟草のやにの蛇に毒なることをおもひいだして、煙管のやにを眼中に入しに、漸に腫消し、痛み和らぎて、一日ばかりに苦惱退ぞき、眼赤きばかりなりしかば、日々にを入たるに、五、六日して全く癒たり。其翌年、其時節、又々眼痛みだしたるに、色々の眼科の治療を施しけれ共癒ず。故に、また蛇毒のことを思ひ出し、又烟草のやにを入しに、忽癒たり。二、三年も其時節に

は、必眼目痛みければ、いつも其後はやにを入れて癒ぬ。此事、村上彦峻の物語也き。

○又、同じ福山の人、夜中に誤りて蝦蟇がまを踏殺せしに、其蝦蟇潰くづるるときに、一方の足の内踝うちこうほしの所に蝦蟇の息かゝりて、其あつきこと熱湯をそゝぐが如くなりしが、それより其処次第に腫て痛むこと限りなし。寒熱甚しくして、数日悩みしが、色々の治療を加へて漸やうやくに癒たり。其翌年、其時節に到りて、其人故なくして頓死せり。蝦蟇の毒、発せしなるべし。是も其時の物語なりき。

此二ヶ条の話しは、橘春暉が『北窓瑣談』の後編第一巻目に載たり。似よりたる談話はなしなれば、鈔録して爰に出しぬ。

蛙の毒気も、蛇の毒気も、眼に災ひするも最奇いとといふべし。又、蛇もやにをきらへば、蛙もやにを恐る。是また奇なり。

和漢奇事変生男子之説 下

『和漢三才図会』人倫之部、男女相変ずる条に、天文年間、中村豊前守息何某の著す処の『奇異雑談』を引て、変生女子二条を載する。今、其『奇異雑談』に出る処を鈔録して、聊いささか我意を加へず、文法、筆工其儘をしるす。

○それがし若年の時、江州嶋の郷に数日逗留する事有。諸人しゆくぐざうだんの中に、一人の老者かたりていはく。「当国枝村といふ宿に、むかしふしぎの事あり。たとへば、年廿はたちばかりなる客僧、一人きたりて一宿す。そのかたち美容びやうにして、比丘尼に似たり。言声、形儀は僧なり。其夜、大雨ふりて翌日もはれず。かるが故に、日とまりす。此人、夜明頃より、其すがた軟弱にして、ぎやうぎ、音声へんじて、女と見へたり。亭主あやしき思ひて、『いづかたより御とをり候ぞ』ととへば、『我はちちこの者なるが、丹波の大野原おののはらの会下あかに二、三年ありて、いまちちへくだり候』といへば、亭主丹波の事ぶあんないなり。ゆへに、くはしくはとはず。そのすがたあやしきゆへに、『僧にて御入候か、比丘尼か』ととへば、うちわらひ、『比丘尼にて候』とこたふ。亭主、おもしろくおもひて、その夜、ふし所に行てと

翻刻 和漢奇事変生男子之説

りか、れば、じたいすれども、ついにしたがつて嫁宿^{かしゆく}す。常のごとし。亭主、先婦をうしなひて、やまめなるゆへに、『さいはひの事なり。夫婦となり、これにとめ申べき』といへば、比丘尼りやうじやうす。すなはち、つゝみて髪をながくす。ほどなく、くわいにんして男子を生ず。やしなひて、好子^{よきこ}をえたり。その子、十二、三の時、道者十人あまり、此里につきて、一宿を此家にさだむ。みれば、みな僧衆也。ひとり、仁^{じん}たる老僧あり。亭主ちそうし、洗足をまいらせ、ざしきをはいて請じいれ、やすめ申し、茶をすゝむ。その子、いで、きう仕^じす。すなはち、非時^{ひじ}をとゝのへすゝむ。亭主、たび人の僕^{はくしう}従にとふて、『いづかたより御とをりの衆ぞ』といへば、『是は、丹波大野^{おののほら}原会下の長老にて御座候』といへば、此よしを内婦聞て、おほきにおどろき、気色へんじ、たつてかきのひまよりのぞけば、『まことに、その長老にておはしますよ』といふて、なみだをながす。ともしびを出す時分は、内婦、『此長老様は見しり申候。出て相看^{しやうかん}申たく候』といへば、亭主、『もつともしかるべし』といふ。内婦、よそほひをあらため、あんないを啓^{けい}し、子息をさきにたて、長老の御まへに出て、『よく御げかう候よ』と申せば、長老のことばに、『此里、家^{おほ}奮しといへども、是に一宿する事、きゑむにて候』とおほせらる。内婦、なみだをながして、やゝ有て、和尚の御前ちかくまいりて申、『みづからをば、御見しり有まじく候。和尚様をば、よく見しり申候。みづからは、ゑちこの国より十八のとしのぼりて、御寺に三年沙弥^へを経候。名をば何と申て、洒掃^{しやうさう}いたし、古則、法問を糺明し、夜話、坐禪をこたる事なくつとめ申さぶらひしが、故郷にしようありて、請暇^{しんか}申てまかり出候。京へのぼり、江州にわたり、枝村につきて、此家にて一宿し候。その夜、夢に女になると思ふて、ゆめさむれば、男根なくなりて、女根になり候。心うかくとして、ふしんながら、ふかくあやしむ心なく、夜あけ候。その夜、大雨ふりて、翌日もはれざるゆへに、とうりうし候。心もちゑも、女になりて候。亭主、抑留^{よくりう}して夫婦のけいやくをなすゆへに、今迄十五年、此家にありつき候。もと僧にてありしことをば、亭主にかくし、今にかたらず候。抑^{そもそも}かくのごときの事、先例もある事に候や。変生男子といひ、あるひは転女^{てんにょ}成男とき、しに、我々は、男身にはかに變じて、女身となり候こと、あさましき進退^{しんたい}業障、深重に候』と申せば、和尚のいはく、『闍提^{せんたい}、半月^{ふたなり}、二根^{にこん}、無根^{むこん}のたぐひになるは、世におほきものなり』との給へば、内婦、『いや、二成^{ふたなり}にてはなく候。僧のときは、男根常のごとくにして、別儀なく候。女になりては、女根つねのごとに

て、べちぎなく候。ただ今、和尚しやうかん申て、むかしにたちかへるこゝちして、たつとく、有がたく思ひたてまつり候』とて、発露涕泣すれば、和尚示に頌をつくつていはく、

天地異法生

人五蘊仮合

鷹依日成鳩

雀入水成蛤

「天地、異法を生ず

人、五蘊仮に合す

鷹、日に依つて鳩と成り

雀、水に入て蛤と成る」

その時、ざしきのくはしののこりの、山のいものありしを、和尚ゆびざしていはく、『やまのいもの、うなぎとなれるがごときぞ。これみな先例也。うれふることなかれ。たゞ、なむぢがいにしへしるところの古則、話頭、よく臆持してわする、事なく、単々に截断せば、何のざいしやう、しんぢうかあらんや。心やすくおもふべし』とのたまへば、内婦しうるいはらし、喜悦、大悟して、礼拝をなしてさりぬ。

そのとき、どうぎやうの中の一僧いで、和尚にとつていはく、『いまの五言一頌の垂示、なんのいわれぞや』。和尚解していはく、『肉身は地、水、火、風、空の五蘊、かりにわがうして、実なる物にあらざるなり。又、本来空の処に、天地出現して住する、これ異法なり。異法の性によりて、異法の万物を生ず。異法の氣にしたがつて、異法の万物転変する也。葵藿は日にむかふて転、芭蕉は雷をきひて長。その目なふして日を見、耳なふして雷をきく。これみな、異法の氣のいたす所なり（『涅槃經』卷の三十二に見へたり）。異法の変にあづからざるものは、たゞ本来の仏性なり。おなじ巻にいはく、

如来常住 无有変易

一切衆生 悉有仏性

「如来常住して、変易有ること無し

一切衆生、悉く仏性有り」

と云々。

翻刻 和漢奇事変生男子之説

七十二候を按ずるに、五日を一候とす。七十二候は、^{すなはち}則一年の日数なり。はじめ立春よりして、一候くゝに万物^{めづり}転変ずるなり。二月の節、第三候五日の間に、鷹変じて鳩となり、九月の節、第三の候五日の間に、雀水に入て蛤となる。かるがゆへに、日によるといふなり。七十二候に、万物変ずる事おほき中に、此二ヶ条、僧の女になれるたぐひなるゆへに、これをいへるなり。七十二候は人しらざる也。山の芋のうなぎとなるをば、世俗皆これをしるゆへに、これを引て、以てたとへとする也。是、僧変じて女になれるの先例なり』と云々。それがし、此ざうだんを聞て、まことしからず思ふゆへに、人にかたることなし。

それがし、天文十年の頃、播州にくだりて上洛の時、たんばのおのはらにて、ひるのやすみするに、同道の人、「大野原の会下に所用有。これより一里ばかりあるほどに、ゆき、やがてかへらん」とてゆく。その間に、宿の亭主と物たりするに、会下の事をかたるうちに、「むかしふしぎの事あり。廿^{はたち}ばかりの僧、故郷ゑちごへくだるとて、江州枝村の宿にて、女になりたる事あり」とかたる。それがし、やがて聞得てりやうじやうす。さるほどに、四十年以前に江州にて、此事を人のかたりしを聞て、まこと、も思はざりしに、今またこの方にてきくうへは、まことなり。此ざうだんを聞て、きゑつなり。それがし、かへつて枝村にてのしだいを、あらゝかたるなり。亭主、聞てよろこぶ。

宝幢院の宗珍^{ほうたういん そうちん}、このざうだんをきかれて、ついでにいはいく。「下野の国にも、また僧の女人に成たること有。是は、ゑいざんの東堂^{ひがしたう}、西谷の吉祥院、智蔵坊の説也。ただ、一往にして、くはしく事をとかざるなり。智蔵坊、実なる人なり。きよごんにてあるべからず」といふ処に、むらさき野の大徳寺の正首坐、「此事、東国にてき、をよぶ」といふて、かたりてはいく。「下野の国より、僧二人足利にゆきてがくもんす。又、おなじき国の僧、文長といふ人一人、おなじくがくもんす。ともに、数年すぎて故郷にかへる。又、十年をすぎて、前の二僧同道して、他所にゆく。路じの小家に酒^{さか}簀^{はつき}あり。二人よりて、濁^{にごり}醪^{ざけ}をのむ。家ぬし内婦、二僧をつくぐとみる。二僧ひそかにいはいく、『此内婦は、足利にての文長によくにたり』といふて、つくぐみれば、内婦のいはいく、『二人の御僧は見しり申候。われくをば、御見しりあるまじく候』といふ。二僧のいはいく、『されば、此方も見しりたるやうにおほへ候』といへば、内婦のいはいく、『我くは文長にて候』といふ。二僧おどろきてはいはいく、『いかんとしたる事ぞ』といへば、内婦のいはいく、『ちか

ごろはづかしき事なれども、かたり申候。足利よりかへりて、三十二のとし、裸根^{らこん}はなはだかゆきゆへに、熱湯をもつてたづる事かぎりなし。はなはだたづるとき、裸根、陰囊ともにぬけ落たり。とりて見るに、用にたゝざる物なるゆへにすてたり。そのあと、開閉^{かいひん}になりてつねのごとし。のちに夫をまうけて、子をうむ事二人なり』とかたれば、二僧あやしみおどろきてさる、ときくなり」と云々。

銀鷄云。此奇説を載たる、『奇異雑談』といへる書は、世に稀なる物にや。友人交斎^{かうさい}、僅に初卷一冊を蔵せり。然るに、其初卷第二か条目に、此変生女子の事を記せり。故に、取あへず鈔録して、爰に加ふ。

○桃青菴が『伊香保日記』にいふ。天保十三^{みづのえとら}壬寅中夏の初、中山道の戸倉宿の旅籠屋、根笹屋何某といふもの、一人の娘を持たりけるが、生れつき奇^きれいにして、年頃にもなりければ、其容色に眼を付る人多くありて、聊^{いささか}持参物して、此家の髻養子になりたる者の有けるが、いかなるゆゑにや、日あらずして離縁に及び、其後も同様の事、両三人に及びければ、近辺の者も不思議の事に思ひ、「或は、斯^{かく}の如く髻の居付ぬは、彼娘^{かのむすめ}はろくろ首などいへる者にあるらん」など風聞する者も有けるが、同所同渡世にて、取分^{とりわけ}根笹屋と入魂^{じつこん}の者有て、是もおなじ年頃の娘を持たりけるが、根笹やの娘と殊にしたしく行通ひて、出歩きなども一所にするやうにて有けるが、いつとなく、此程妊娠のやうすにて、月数も重なり、隠しおほせぬやうになりければ、父母も心付、娘を責^{せめ}尋ね、「其相手は何者ぞ」と問糺しければ、娘のいへりけるは、「根笹やの娘に添^{そひ}ふしして、斯^{かく}あさましき事にはなりぬ」と答へければ、父母は驚きいぶかり、「彼も女なり。女を相手に、何ぞさる事の有べき」と聞入^{きこいり}ぬを、娘は、「彼娘^{かのむすめ}と交りたるより外に覚えなし。疑ひ給はゞ、根笹屋へ行て、彼娘に尋ね給はれかし」と面目もなげに申ければ、「さらば、入魂^{じつこん}の間がらにもあれば、尋ね見ばや」とて、直様^{すくさま}根笹屋に至り、然々のよしを申談じけれども、根笹やにては、「以の外の事なり」とて取合ず。娘も同様に、「しらざる」よしを申ければ、是非なく立戻り、又娘に其よしをいひきけ、糺しければ、娘は以の外に取のぼせ、「今更、左様なる心得ぬ事をいふべき筈はなきことなり。此上は、我身直々行て、兎も角もいひかたらひ、其上にも、しらざるよしを彼娘の申さば、生ては帰り不^し申」杯と、狂気の如くなりて、立出んとしたりければ、父母是

翻刻 和漢奇事変生男子之説

を引留めていふやう、「実^けにさる事有^{あり}たることにしあらば、斗^はらふべき様あり。自ら行ていかに申共、彼に不実の心ならば、詮なき事なり。私沙汰にては迎^{もて}も届くまじ」とて、此子細を其筋へ語らひ、御代官大原左近様、中之条御役所へ訴状を以て、「不実御吟味、被^た成下度」段、願出たりける。是によりて、相方共召出され、御吟味に相成、御吟味中、密々御調等有^し之、相手方不実意の儀、得^{とく}と相分り、きびしく御利解被^り仰聞候に付、相手の者共恐入^{おそれいり}、御猶予相願、根笹や方にてても娘を得^しと責^せれし候処、此娘陰門常体ならず、陰戸の両べり高くはり出し、陰舌も常体と違ひ、女子の形には候へ共、両べりは陰囊の成就し損じたるものか、其内に玉を存在^{ぞんざい}し、月経の通道無^し之、淫事に臨み候へば、陰舌の内よりして、男根を張出し、便道も精液も是より通じ候ゆゑ、交合に及び、妊娠いたさせ候儀、相分り候に付、立入人も有^し之、「妊娠の娘を根笹や方へもらひ請^{うけ}、娘をも男に相改め、夫婦に仕^{つかまつる}熟談内済仕^な度候間、何卒以^も御慈悲、御聞済御下げ被^た成下度」段、一同願上候処、「容易ならざる儀には候へ共、格別の御憐愍を以て、御聞済に相成候」よし。其末、如何なりゆき候やしらざれども、「斯^{かく}御役所沙汰にもなりたる事にしあれば、浮たる事にはあらず」と、土人の語る儘を、珍ら敷事なれば、書留めおきぬ、と云々。

銀鷄云。此話しは、友人渡部交斎なる者の筆記中より鈔録せり。余、いまだ桃青菴の『伊香保日記』といへる書を一覧に及ばざれ共、桃青の二字は、芭蕉翁の初号なれば、定めて誹諧者流の人の作なるべし。文中に御代官の御名前等、明かに載てあれば、虚説とは思はれず。世には奇なる事もあるもの也。

○富岡御陣屋へ御届に相成候、変生男子の事、渡部交斎なる者の扣^{ひか}書に、嘉永四年子の八月、南御番所にて御糺しに相成候。慥^{たしか}成事ゆゑ、御届書を其儘左に誌す。

以書付御届申上候。肥後国天草郡大浦村、百姓嘉左衛門娘屋奈、寅の廿六歳。右の女、追々男子に變じ候段、届出候に付、当人は勿論、親并に親類、組合の者迄、得^{とく}と承り候処、出生の砌^{みぎり}は陰門少く、左右肉厚^{にくあつ}にて、陰戸高く、人並には少々變じ居候^{をり}へ共、女子に相違無御坐、十七、八歳の頃迄は、右のまゝにて候処、其後陰門の左右、陰戸とも段々太り、縁は陰囊の形になり、陰戸は陰莖^{いんきやう}のかたちになり、平常は陰莖一寸余、廻り二寸四分ほどに相見え、便孔^{べんかう}、頭より三分程も下の処に有^あ之候。発動^{きざし}の時は、長サ三寸位、廻り四寸二分程に相成、乳は已前^{いぜん}よりちいさく有

之候段、申立候に付、得と見分仕、再応相糺候の処、右申上候通り無相違、勿論、常の男子とちがひ、少は足は細く候へども、当時、面体其外男のすがたにて、髯も生じ居、只今にては全く男子の業を仕、女子の業は夜分系など細候旨申出、全く前段の通り、男子に變じ候に相違無御坐候間、男の名前に仕度旨、親類、組合の者より願出候に付、如何可仕や、此段以書付申上候。宜敷、被仰付可被下候。以上。

天草郡栖本郷

大庄屋

小崎六郎右衛門 印

富岡御役所

以書付申上候。大浦村嘉右衛門娘屋那、改一平、寅の二十六歳。右嘉右衛門娘屋那儀、男子に變じ候間、男の名前に改申度候段、申上候処、願の通被仰付、難有奉畏候。則、書面の名前に改遣し可申候。依之、此段御届申上候。以上。

栖本郷大庄屋

小崎六郎右衛門 印

富岡御役所

右一件、小崎六郎右衛門、其外の者共、呼出し相尋候の処、前書の通り、十七、八歳の頃迄は女子にて、密通等致し候儀も有之候よし。其後、追々陰門の様子替り、廿六歳の節、全く男になり、三十歳の頃妻を持、既に妊娠いたし候へ共、元来病身にて、子供も出生いたさず、天保三辰年三月、五十二歳にて相果、当村同人身よりの者、跡株相統罷在候。以上。

弘化四未年十月

翻刻 和漢奇事変生男子之説

右は、未の十月中、御勘定留役増田雄右衛門、富岡役所滞留中、同処詰所竹尾清右衛門、元手附大坪胸四郎より留記取調、并に右大浦村役人共相糺候段、書綴り申出候言面の写、則これなり。

○文政の初めつた、深川山本町、あぎなをすそつぎといへる処に、常磐津文字久米といふ者あり。父は元豆腐屋にて、其辺に住居したりしが、世の中の事、心に任せぬにや、渡世を仕舞、「娘の芸を活けいにせばや」と思ひ立て、文化の末に爰に移り来りて、常磐津ぶしの師匠を初めさせたりけり。此久米といへる娘、幼少より常磐津戸名太夫といへる者の弟子にて、生れつき此芸にすぐれ、十五、六歳の頃にも、師匠と共に屋鋪などへ出る事ありて、掛合に浄瑠璃を語るとき、物越に是を聞ば、師弟の甲乙しることなく、「是より戸名太夫となり、是より文字久米にて候」など、口上を以てしらせざれば、掛合に語る浄瑠璃も、一人にて語るやうにて、「此娘、男子ならばよき太夫にもなるべきを、おしきこと也」など、ほむる者も多かりしとぞ。斯迄に其芸をよくしたりしかば、爰に來たりしより、男女の弟子も多く附て、繁昌したりけり。美音にて、こゑも男のやうに、形も丈に準じ、咽喉なども至てふとかりしとぞ。然るに、人の噂しけるは、「此娘は婦男にて、上十五日は男になり、下十五日は女になる」よしをいへれど、実とも思はれずありしが、弟子のうちに何某とて、名を取て師匠にもなるべき下心得の娘有しが、日毎に稽古を出精し、文字久米も外ならずをしへ、其中外の弟子よりもしたしかりしが、此娘十五、六歳の頃より、何となく不思議の浮名立て、「師匠と密通し居る」よし、噂する者の有けるを、弟子兄弟にて、此娘に取分けしたしき者の、あるとき密に尋ねていふやうは、「左様なる事はよも有まじけれど、師につき、お前につき、かゝる噂聞も苦しければ、実を語り給へ。共にかたらひて、すべき様もこそあらめ」と、実意を尽して問ければ、此娘答へていふやう、「此事は実に話しがたきことなれども、左迄にいひ給ふ上は、はなし申なり。実に去ことあり。師は上十五日男となり、髪形つくらふ事もし給はず、物事も疎漏になり、衣類も改めず出歩きなどもし給ふを、下十五日は女となりて、化粧など取分し給ひ、をしへ給ふことなどいひ細かにやさしく、外へ出給ふにも、衣るいなどした、めかへ給ふやうになり給ふは、兼て知給ふ処なり。隠し処も人並より毛多く、其中に男のもの有て、男になり給へば、是より小用も通じ、又女になり給へば、

男のものは縮みて、平生へいぜいのやうに、下より小用も通じ給ふ。いと気味あしくおもひ候へども、其芸の勝れ給ふと、をしへ給ふことの細こまかなると、情の深き事人に越給こえへるとがしたはしくて、かゝる密事ひそかごとせる中にはなり侍りき。さるを、此程は男の弟子にもさるもの出来いでて、うとましく、ねたましと思ふことも折々は有ゆゑ、斯は語り申也」といひしが、「それより後、うしろめだきことなども有て、弟子なども多くはなれたりしが、流石に芸の勝れたれば、又立もどる弟子も有て、文政の末迄、同じ処に取続とりつづき居たりしが、三十五、六歳にて身まがりたりし」と、寫田氏の妻、若かりし時、文字久米が弟子にて、よくおぼへ居て、咄ふたしせられたり。婦男生ふたなりのことは、爰にも有、かしこにもさる事有たり。今も猶、「まのあたり、そこくこにあり」など、人の語ること多けれど、其事跡たしかにもあらざるを、是は其者の弟子の、まのあたりにしりて語れるを、わが友誹師はいし如周じしゅうが聞たる儘に書留おきたるを、爰に写しだしぬ。

銀鷄かづいふ。此話しは、塵界といへる人より聞し話し也。されば、本文にいへる寫田氏の妻、并に誹師如周など、余曾かつてしらざる人なり。

○天保の初頃、玄治店げんやだなに高名なる浮世絵師あり。其頃より、此絵師の方へ、日々絵を習に来る娘あり。年は十三、四にて、至て発明なる産也うまれしが、上十五日は男子の如く、物のいひざま、立振舞に至迄、少しも男に替る事なく、殊あらに荒々敷様子なれど、下十五日は是に引替、全く女子にて、何にても替る事なく、物毎ものごとやさしく、至て質朴しうはくなりければ、人々にも不審の事に思ひたる所、或人來きたりていふやうは、「イヤ、こなたへ近頃日々参り候娘何某は、不思議なる事あるよし聞けり。上十五日は男子に成て陽物生じ、下十五日は女と成て陰門と変じ候よし。彼れが母と極懇意ごくこんいにいたし候髪結かみゆひのお貞まさといふ女、正敷男まさしくとなり、女となりたる所を、両様共に見届たるよしにて、私の家内へ委しく話しに及び候。世には珍敷事めづらしきことも有物にて候」との事。絵師の親方、是を聞て、「いかさま去事さるごとも有にや。私方へ日々稽古に参り、ゑをならひ候内も、殊の外物毎ものごとあらく、何かがさつにて、女之行儀に洩れたる事など、しばく見うけ候。既に御覧の通り、向ふの土蔵を立候節たてなど、男の子と一ツになりて、尻をはしより、はちまきをして、足場へ上り、わる騒ぎなど致し候事度々にて、又或時、近所に急病人ありけるが、其家無人にて、医師へ人をやるにも困りけるゆへ、私

翻刻 和漢奇事変生男子之説

方へしらせ、『鳥渡お弟子をおいしや迄頼み度』よしを申されしことなれば、承知いたし、誰かれとおもふうち、かの娘、絵を写してゐたりしが、『私が参りませふ』といふより早く、尻をはしをり、近所の家へかけ出して参りしこと有。其時の躰たらくなど、少しも女の仕打にこれなき故、弟子共杯も興をさまし候事これ有り候。是につき、今の御話を承はれば、全く虚談にこれなく、所謂ふたなりといふものにて候や。又、女子に成候節、此様の話を致し聞せ候処、殊の外恥候様子にて、顔など赤らめ候事杯も有之候」よし、挨拶に及びけるとか。

或日、弟子共、笑ひ画の彩色を致し居候処へ、彼娘来りし故、早速其名を呼て、「此彩色は、今日中に仕上ねばならぬ間、誰さん、おまへも少し手つだいなさい」といひければ、(女子の時)彼娘にこりともせず、自分の絵をかく場所へ居り、一向に見向もせず、外の画に取懸りけるとぞ。其後、又々笑ひ絵を写し居ける節、彼娘(男子の時)其絵を取て、つくぐとながめていふ、「此やうな大きな陽物もあるまい。是ではあたまと同じことだ」とて、大声上て笑ひけるとぞ。又或時、弟子の内焼芋を買来り、彼娘の名を呼び、「一本上やうか」といへば、(男子のとき)「アイ、おくれよ。私はおまへのお道具のやうな、ふとゐがすぎだ」といひつゝ、手を出し、芋を貫ひけるが、其仕打少しも男に替りしことなしといふ。又、鯛の酢煎りの惣菜の出来たるせつ、彼娘もそれにてひるめしを振廻れけるに、鯛の頭よりむしやくと喰ひける故、弟子共、「おやく、誰さんは男もかなはぬくひやうだねへ」と笑ひければ、「さやうさ、鯛は頭にうまみがあるといふ。頭位は尻でもないよ」といひつゝ、飯を四、五碗喰ひけるとか。食も男の時は大食、女の時は小食といふ。女の時、歌がるた、羽子板杯のもて遊びの節は、至極やさしく、殊にまりなどをつくを見るに、至て上手なり。酒は、女の時猪口に二ツ位はのめど、男の時は絶て飲ず。常に鯛を好て食する由。或日、主人の留守に、弟子共四、五人打寄、彼娘をとらへ、無理無体に前をまくりて、実正を見届んと、手取り足取にて、能々其かくし所を見定めけるに、女子共男子共、一向に分らざる由、皆々奇異の思ひをなしたりとか。図有、下に出す。此乱妨に及びし時は、女子の節なれば、啼さけび、大声上しを、跡にて皆々後悔し、「男子の時見たらんには、斯る苦しきは有まじき」とて、打寄話しけるとぞ。

銀鶏の云。此話は、或画師より聞し正説なれ共、此娘は猶更、玄治店の画工も、乱妨を働きし弟子達も、又おの

翻刻 和漢奇事変生男子之説

変生男子の説

○あやしきを見てあやしまざれば、あやしきことおのづから消散し、災かへりて幸となるといへり。先頃、或何某の院の寺小姓、十五、六歳にし「て」女に変じ、終に大黒と化し、常に和尚を尻に支揮して、米錢を化縁に募らせ、綺麗ずきより思ひ立、雨のもり屋を責て、「仏の仇なり」と是をふせぎ、本堂、客間の修復の手入出来上りたる。檀家の悦びに、見悪き和尚の鼻を高くしたりとぞ。

又此頃、若宮といふ処の居酒屋の娘、十五歳にて男と変じたれども、流石に恥てや、父母にもしらせずありけるが、いかなる春情の動きたりけん、或娘のもとへ夜ばひして、其事露顯し、父母も是を捨置がたくて、終に前髪を剃落し、名をも男に改め、見世の手伝ひなどさせ置きたるを、珍らしきことなりとて、聞伝ふる人々、日毎に此酒屋にいり来り、或は此者に近付酒酌ちかづきさけくむも有、又は此話を肴に盃あぐるも有て、思の外に渡世繁昌し、きのふにかはる賑はひとなれ



上十五日、男の氣を受たる時は、鳥渡ちよつとの風俗も此や
 うなることにて、少も女の風にあらず。言語はいふに
 及ばず、立ふるまひ等、何れも男子にかはりたること
 なしといふ。

下十五日、女の氣を受たる時は、物事至つてやさしく、
 甚伶俐はつめいりなるよし。彼乱妨かのの弟子達、四、五人
 にて、むりむたいに隠処をひらき見たる処、図の如く、
 里芋のやうなる物上に付き、其下に小さき穴あり。然
 れ共、全く陰門とも思はれず。又、芋のやうなる物の
 尖さへより小便通ずる由。精き事は絶てしれずとの事なり。

るは、変生男子か、身上直しか、流行体の語路に等く、廻りよくなりたるになん有ける。

抑、^{そもそも}変生男子のことは、漢土の書にもあまた見え、仏の経にも明かに解れ、密家には此法ありて、高貴の御方御着帯のことあれば、其筋に仰付られて、此修法を行せらるゝこと、常の事なり。其驗^{しるし}のありなしはしらねども、人能^{よく}是をしる処にして、理外の怪きことにはあらず。是皆、理中の理なればなり。

『造化論』に曰。天地開闢^{かいびやく}のとき、大易あり、大初有、大始有、大素有。大初は気のはじめ、大始は体のはじめ、大素は質のはじめなりと云也。氣の初めとは、一陰一陽をさしていふなり。体の初めとは、男女の類をさしていふなり。質の初めとは、賢愚の類をさしていふなり。前にいふ大易とは、大極といふが如し。『易』の大伝に曰。易に大極あり。これ両儀を生ずといへれば、大極の内に陰陽は兼て備り有也。人は一箇の小天地なれば、又一ツの大極なり。故に、体中に陰陽兼備る。男子に不用の乳ありて、指をもて是をひねれば、思はざるに肉^{かならず}必起る。是、体の女子とひとしき処なり。女子に不用の陰舌有て、時^{きざ}有て発動す。是、体の男子とひとしき処なり。虚にして不屈、動いて愈^{いよいよ}いづる。造化極りなければ、変も又極りなくして、希^{まれ}に変生男子を見ることが有べし。

左あれど、当然の理によれば、かゝることはあるまじきこととし、眼^まのあたり見ることありても、「狐狸の業なりや」など疑ひ、只怪希^{けう}のこと、のみおもひ、『漢書』の中には、変生男子は賤き者の王となるの兆なりとし、変生女子は王者位を失ふ兆なりなどといへるは、怪きに附会せるの甚^{はなはだし}きにて、彼^{かの}「造物者の細工屑なり」といふ処に、思ひの及ばざる処ならんか。疆^{かき}りなき世の中を微細にせば、是を以て衰世の兆といふ理あらんや。若それを兆とせば、提婆品^{だいばほん}の変生男子、又は変生男子の修法有事を何とかせん。なきことを面白く有様^{あるやう}にいへるは、漢人の癖^{くせ}にて、是を以て証とせば、笑ふべきの甚しき物にあらずや。前の若宮町の調べ書といへる物を借得たれば、是を写して貰ふ手ついでに、「目ざまし草にもなれかし」とて、老が愚痴をいさゝか其始に書添集めて、かり筆に写しもらひ置ぬ。

『鬼神論』に曰。牛衰といへる者、生ながら虎となり、大原の王舎が母、生ながら狼となり、江愛の黄氏の母、生ながら亀となり、李勢が婦人、生ながら蛇となる。是等の類、漢土の書に出たることなれども、それは目遠きことなれば、おぼつかなきことなりともいふべけれど、遊里の才子、生ながら馬となり、三浦の淫婦、生ながら牛となり、ふじま

翻刻 和漢奇事変生男子之説

の下女、踊りて猿となり、きてんき、て犬となる。雨となり雲となる色情の迷ひ、忽たちまちごろつきとなり下るさが。是等の類は、雷神門の定見世よりも多くて、取広めければ、そこらにひろげ余るなるべし。飛だりはねたり、かはつた理屈、是と彼とは事異ことにして、筋の違ふた様なれども、つまる処は同じことにて、変化は只是一理也。「天、陰陽五行を以て万物を化生し、氣以て是が形をなす」と『中庸』の訳にも見えたれば、容かたちのうつくしき娘も、立派に見ゆる息子も、心がけしも、犬猫ならんには、「心は氣なり、氣もつて形をなす」といへば、生ながら犬猫に變ずることの、決してなしとは請合うけあひがたし。若、化して夫それになりたりとて、是理外これの怪きことにはあらず。ましていはんや、三世流轉の理によらば、死して後、畜生道に落ること、何の疑ふ処かあらん。すべて此類は、疑ひ怪むべき処にあらず。「去心こころは持まじ」と、恥恐おそるべき所にあらずや。

爰に集る変生男女の類も、前の生ながら化する者とひとしく一理にして、是を仏家にていはゞ、因果の理によるといはん。是を『因果經』の上に見みれば、男色ひさを嚮むかぐ物か、又ははりがた色などいふものに執着せるが因となりて、此果を受るといはんか。『梵網經』色欲戒の条に、独姪どくしのことを細かに解とけたるも、若くは此因、此果にあたるか。是等のことは、子供もしつた太子、放蕩とらが如来の説法にて、いらざる釈子の定本立なるべし。大道に見れば、怪むべく恐るべきは私の心にて、世の中にある、極めてあやしきことにもあらざることをば、ひたすらにあやしと思ひ、心のうちにある、極めて怪きことをば外にして、あやしとおもはぬ、おろかの中にもおろかなる。我子孫どもに是を見せたらんには、「世中にある彼をすて、こゝろの内にある是をあやしみ、恐るゝ、よすがにもならんか」とて、子には目のなきめくらぢゞ、むしろのうへの手遊びに、斯は物し集めおきぬる。

銀鷄云。此文は、普見ふけんとかいへる盲人、こたび牛込なる若宮町の變生男子のことを、取つまみて記したる文の端書なり。最いとをかしと思ふ物から、聞しまゝ、を爰にしるしおきぬ。